

第二章

遊びと学びの 子ども学

～Playful Pedagogy～

Chapter



第1節：Playful Pedagogyとは

- 2-1-1 Playful Pedagogyの目指すものは？
- 2-1-2 喜びいっぱいの生命感動学
- 2-1-3 子どもの「遊び」をはぐくむ保育者：
育ちを見通した「学び」の多様性
- 2-1-4 「遊び」と「教育」の板挟み
～幼児の Guided play（誘導的遊び）への理解～

第2節：シンポジウム：東アジアの現場

- 2-2-1 国定基準からみた台湾の幼稚園における「遊び」の位置づけ
- 2-2-2 「遊び」を通して「学ぶ」～教育神経科学の視点から～
- 2-2-3 「あー、楽しかった！明日もまた遊びたい！」
という保育を目指して
- 2-2-4 パネルディスカッション 東アジアの現場から

第3節：遊びの中に学びがある

- 2-3-1 学習の場としての遊び学習：
子どもの楽育教具と空間デザイン
- 2-3-2 Playful Learningの情景
All you need is... Love, Passion and Playful Learning

2-1-1

Playful Pedagogy とは

Playful Pedagogyの目指すものは？

榊原洋一

Sakakihara Yoichi …………… CRN 所長・お茶の水女子大学大学院教授



お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授、医学博士。1951年東京都生まれ。東京大学医学部を卒業後、同大学附属病院小児科に勤務。発達障害のある子どもの医療に携わりながら、発達のメカニズムを研究する。東京大学医学部講師を経て、現職。専門は、小児科学、小児神経学、発達神経学、国際医療協力、育児学。主な著書に『乳児保育の基本』（フレーベル館）、『発達障害と子どもの生きる力』（金剛出版）など。

◎ 子どもの遊びに 大人がいかにかわるか

私は二十数年の間、小児科医として大学病院に勤務し、子どもが遊びを通して多くのことを学ぶ姿を見てきた。学びと遊びは、子どもの年齢が上がるにつれて分化していくが、幼児期には密接に結びついていると考えている。

ただ、一口に遊びと言っても、その内容も仕方も多岐にわたる。例えば、子どもが大人から何の指導も受けず、ただ自由に遊ぶ場合もあれば、大人の指導を受けて遊ぶ場合もある。どのような遊びでも、同じように学びに結びつくのだろうか。あるいは、遊び方によって、得られる学びも違ってくるのだろうか。

こうした疑問を抱くようになったのは、10年ほど前、現在の勤務している大学に赴

任し、幼児教育に携わるようになってからである。

私の勤務している大学には附属幼稚園があり、教え子の学生がそこで保育実習を行うため、私も付き添うことがある。初めて付き添ったときは、私も子どもと遊んだのだが、後で園長先生に注意された。「もっと子どもを主体的に遊ばせてほしい」と。

言われてみれば、私は「積み木をしよう」「ブランコに乗ろう」というように、私がしたい遊びをすることだけを考えて、子どもを誘っていた。子どもに自分のしたいことを押しつけてしまっていたと反省した。

それ以来、保育実習に付き添うたびに、幼稚園で先生方がどのように子どもとかわっているかを注意して見学するようになった。一見すると子どもがただ自由に遊んでいるだけのように感じるが、よく見るとそうではない。どの先生も遊んでいる子ど

もの様子をしっかりと見とり、子どもが興味を持てるように働きかけるなど、必要に応じた対応をしていることに気づいた。

これをきっかけに、私はいくつもの幼稚園や保育所を見学するようになったが、受ける印象は同じだった。どの幼稚園や保育所でも、子どもが遊びを楽しむだけでなく、保育者が目的を持ち、それを実現できるように遊びにかかわっていると感じる。つまり、子どもの主体的な遊びを学びに結びつけているということである。

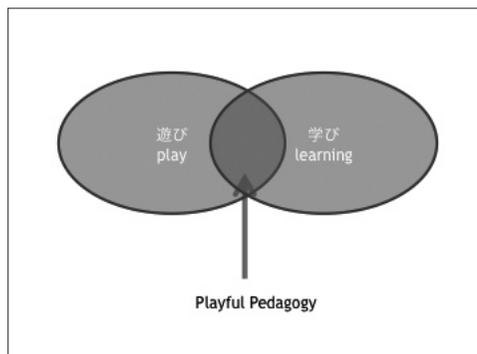
日本の幼稚園や保育所が以前から遊びを通した教育を大切にしていることは知識として知っていたが、幼児教育の現場を知る中で、身をもって感じるようになった。

● Playful Pedagogyの鍵となる Guided playの特徴

子どもの成長に対する遊びの影響についての研究は、近年、欧米の幼児教育学者や発達心理学者によって力が入られている。

欧米にも遊びを通した教育の仕方があり、Playful Pedagogy（楽しく遊びながらの教育）と呼ばれている。—— 図①参照

これを充実させるための重要な方法の1つとして注目されているのが、Guided play（ガイドされた遊び）である。これは、どの



図①

ような遊びなのだろうか。

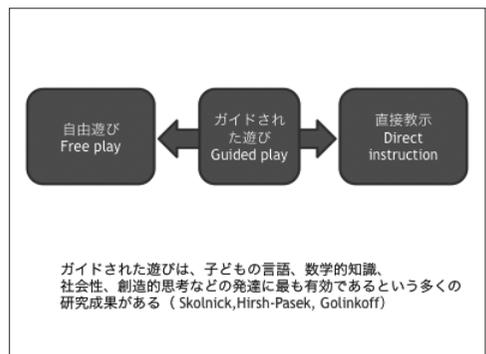
子どもの主体性によって、遊びを2つに分けてみよう。一方の極は、最も主体性が高い遊び、Free play（自由遊び）である。ここでは、大人は一切かかわらず、子どもが自由に遊ぶ。もう一方の極は、最も主体性が低い遊び、Direct instruction（直接指示）である。ここでは、大人の指導に子どもがただ従うことになる。そして、Free playとDirect instructionの中間に位置づけられる遊びが、Guided playである。—— 図②参照

アメリカの発達心理学者Hirsh-Pasekは、Guided playを成り立たせる要件として次の3つを挙げる。

- ①保育者が教育目的に沿った環境を用意すること
- ②保育者が子どもの自然な好奇心や探究心を刺激するように遊びの目的を設定すること
- ③保育者が子どもに何を学んでほしいかを考えて遊具などを選び、与えること

Hirsh-Pasekが、子どもに対する保育者のかかわり方を重視していることがわかるだろう。

このHirsh-Pasekによる定義に従って、Guided playとはどのような遊びなのか、その特徴を確認してみよう。まず「子どもの自然な好奇心や探究心」を重視する点で



ガイドされた遊びは、子どもの言語、数学的知識、社会性、創造的思考などの発達に最も有効であるという多くの研究成果がある（Skolnick, Hirsh-Pasek, Gotinkoff）

図②

Direct instructionと異なる。また、「教育目標」の設定、それに沿った「遊ぶ環境」の整備、遊具の選定・提供などを大人が行う、換言すれば、すべてを子どもの自由にさせるわけではないという点でFree playとも異なる。つまり、Guided playとは子どもの主体性を尊重する一方、子どもの好奇心や探究心を刺激できるように大人がしっかり計画を立て、かかわる遊びといえるだろう。

— 図④参照

● Guided playはなぜ有効なのか

遊び、特にGuided playは、言葉や社会性の獲得など、子どもの発達にとって大きな役割を担うと、Hirsh-Pasekは述べている。では、なぜGuided playにそのような力があるのだろうか。これについて考えてみたい。

脳科学の研究では、子どもの成長は、子どもが抱く感情によって大きく左右される可能性があることを示唆している。楽しさや喜びなどのポジティブな感情を多く感じる環境にある子どもほど、発達が早く、学習内容を身につけやすい傾向が見られるのである。

そのため、Direct instructionでは、たとえ多くのことを学べるような遊びを保育者



図④

が用意したとしても、子どもの感情が考慮されない以上、有効であるとはいえないだろう。

Free playでは、子どもは遊びに楽しさを感じるに違いない。その点では効果的であるが、保育者がかかわらないため、遊びが必ずしも学びに結びつくとは限らないだろう。

Guided playでは、保育者は子どもが学ぶ環境を整えつつ、あくまでも子どもが主体的に参加し、活用できるように促すことに務める。だからこそ、子どもは楽しさを十分に感じながら効果的な学びができるのではないだろうか。

Hirsh-Pasekも、「子どもが最も発達するのは、遊んでいるときである」と述べている。さらに、ただ遊ぶ、Free playを行うだけでなく、保育者によるガイドが加わる、Guided playとなることで、子どもの発達が促されることをさまざまな研究データによって裏づけている。— 表①参照

● Guided playは日本の伝統的な幼児教育法

子どもの主体的な遊びと保育者の適切なかかわり。Guided playに見られるこの要素は、日本の幼児教育が昔から充実させているものである。Guided playと日本の幼児教育法は同じ特徴を備えていることになるため、日本では伝統的にGuided playが行われていたと言っても過言ではない。一方、かつて私が学生の保育実習に付き添ったとき、幼稚園の園長先生にたしなめられた遊び方は、Direct instructionに当たると言うことができる。

恐らく、日本の保育者は日々子どもと向き合う中でGuided playの効果に気づき、そのノウハウを後輩へ伝授してきたに違いな

表① Guided playが子どもの発達を促す研究データの例

学力における有効性	社会情緒的発達における有効性
<p>幼稚園で語彙を学習する30分間の活動を週2回、2か月間行った。活動内容は次の2つ。</p> <p>①30分間すべて指導者から教えられる</p> <p>②20分間指導者に教えられた後、学んだ言葉を使ったGuided playを10分間行う</p> <p>①を行ったグループよりも②を行ったグループの方が、多くの語彙を身につけた。</p>	<p>ヘッド・スタート・プログラム（※）に参加している子どもを、①Direct instructionを行うグループと②Guided playを行うグループに分け、計画スキルを測る活動などを実施した。その結果、①のグループよりも②のグループの方が事後テストの成績が良かった。また、自由遊びの時間の過ごし方にも違いが見られ、②のグループの方がごっこ遊びを積極的に行うことが多く、何もしていない時間が少なかった。</p>

いずれもHan, Moore, Vukelich, Buell(2010)の研究より。

※アメリカ合衆国政府の支援のもとに行われるプログラムで、低所得層の子どもなどを対象とする。幼稚園入園の準備として、読み書きや言葉の力を高める活動などが行われる。

い。何世代にもわたる保育者の経験が積み上げられているからこそ、アジアの多くの国の幼稚園や保育所で英語や算数などを教えることが増える中、日本では遊びを通じた教育を連綿と続けられているのだと考えられる。

● 保育者には自信を持って子どもと向き合ってほしい

今後の課題について見てみよう。

先に紹介したアメリカの発達心理学者Hirsh-Pasekは、Guided playを中心としたPlayful Pedagogyの有効性を証明するために、さらに研究を続ける必要があると述べる。特に重要なポイントとして挙げられているのは、次の3つである。

① Guided playの定義を確立すること

Guided playとはどのような遊びかという概念を明確にすることである。前述したように、Hirsh-Pasek自身はその成立要件を「教育目標の設定と環境の整備」「子どもの好奇心・探究心を刺激する目標の設定」「学びに応じた遊具の選択」とするが、異なる見解を示す研究者もいる。何がGuided playかがはっきりしなければ、その効果を検証できないし、普及させることもできないため、共通する定義を打ち出す必要があるという。

② Playful Pedagogyが子どもの発達・学習に及ぼす影響を明らかにすること

効果があることを示すデータはある程度得られているが、不十分であるという。1000人以上の子どもを対象に10年以上にわたって長期的に継続するような、大規模な研究が求められると述べている。

③ 遊びと学びとの因果関係を明らかにすること

Guided playがFree playやDirect instructionよりも子どもの発達に効果があるのはなぜか、そのメカニズムを解明することである。

このようにHirsh-Pasekは研究者にとってのポイントを挙げたが、では保育者にとってのポイントとは何だろうか。私は、これまで通り、しっかり子どもの様子を見とることだと考えている。日々、子どもと接する中で、子どもがどのような遊びに喜んで参加し、多くの学びを得ているかを把握して行ってこそ、幼児教育が豊かになるに違いない。

Guided playの長所、すなわち日本の幼児教育の長所は、近年の欧米での研究によって科学的に立証されつつある。日本の保育者には、自信を持って従来の教育法を実践していただきたい。

2-1-2

Playful Pedagogy とは

喜びいっぱいの生命感動学

小林 登

Kobayashi Noboru …… CRN 名誉所長、東京大学名誉教授



医学博士、東京大学名誉教授、CRN名誉所長、国立小児病院名誉院長、日本子ども学会名誉理事長。1954年東京大学医学部医学科を卒業し、東京大学教授、国立小児病院院長、国際小児科学会会長などを歴任。日本医師会最高優秀功労賞（84年）、毎日出版文化賞（85年）、国際小児科学会賞（86年）、武見記念賞（2003年）などを受賞。01年には勲二等瑞宝章を贈られた。主な一般向け著作に、『風韻怎思—子どものいのちを見つめて』（小学館）、『子ども学のまなざし』（明石書店）など多数。

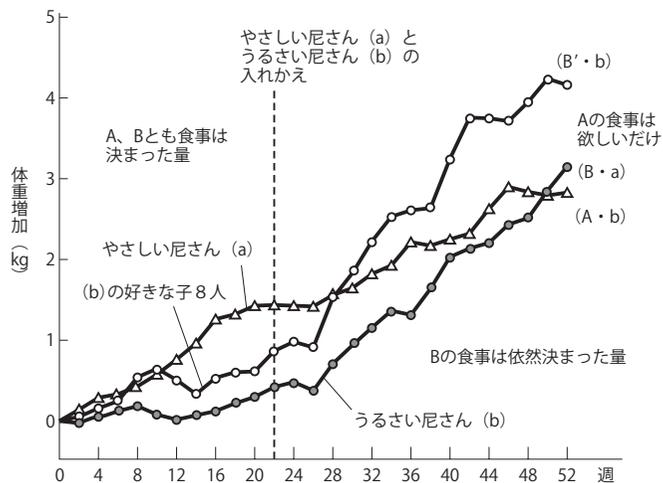
◎ 大人の接し方が、子どもに及ぼす影響とは

保護者や保育者が子どもに優しく、思いやりをもって接することが、子どもの体と心の発達にとって、いかに重要であるかを考えてみたい。

私の専門である小児科学のキーワードの一つに、「Joie de vivre（生きる喜びいっぱい）」というフランス語がある。「Joie de vivre」であることは、子どもの心身の健やかな成長に欠かせない要素として以前から重視され、その正当性がさまざまな学問領域の研究によって科学的に裏づけられて

もいる。

例えば、イギリスの栄養学者Widdowsonが1954年に発表した論文を見てみよう。これは、ドイツのA、B2つの孤児院を約1年間調査し、養育者の接し方の違いが子ども



図① 養育者の性格と孤児の体重増加曲線

の発達にどのように影響するかを研究した論文である。— 図①参照

どちらの孤児院も子どもに与える食事の量は同じだったが、子どもに優しく接するシスターがいたAの孤児院の子どもは体重がよく増え、子どもに厳しく接するシスターがいたBの孤児院の子どもは体重があまり増えなかった。しかし、Aの孤児院の子どもほどではなかったが、Bの孤児院でシスターに特に可愛がられていた子ども8人は、ほかの子どもに比べれば体重が増えていた。

調査を始めて半年ほど経った頃、Aの孤児院のシスターが辞めたため、Bの孤児院のシスターが彼女の可愛がっていた8人の子どもを連れ、Aの孤児院に移ることになった。Bの孤児院には体重が増えていない子どもばかりが残ったわけである。

そして、Aの孤児院ではシスターが代わったのを機に子どもの食事の量を増やしたところ、Bの孤児院から来たシスターに可愛がられている8人の子どもは以前と同じように体重を伸ばしたが、もともとAの孤児院にいた子どもは以前に比べて体重が増えなくなり、シスターに可愛がられていた8人の子どもの平均体重がAの孤児院にいた子どもの平均体重を上回った。

一方、Bの孤児院では、子どもに優しく接するシスターを新たに迎えた。すると、食事の量は増やさなかったにもかかわらず、どの子どもの体重も順調に増えるようになった。その平均体重は、数か月後には、もともとAの孤児院にいた子どもの平均体重を上回ったほどである。

優しく育てられた子どもほど体の成長が良くなるのは、子どもが「Joie de vivre」になっているためと考えられる。

●うれしさを感じなければ 成長ホルモンの分泌が 阻害される

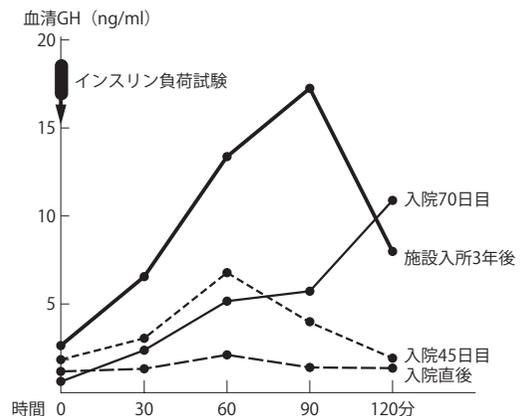
「Joie de vivre」であることは、身体の発達を促す物質、成長ホルモンの分泌とも密接な関係があることがわかっている。これについて見てみよう。

結婚生活がうまくいかないなど何らかの事情により、保護者が我が子に愛情をもって接することができなくなると、子どもの発達に大きく影響する。特に乳児期・幼児期の子どもは下痢や嘔吐を繰り返し、身長と体重も伸びなくなり、さらには抑鬱症状が表れるなど、身体と精神の健康状態が明らかに損なわれることが多い。

保護者から十分な愛情を受けられないために表れるこのような子どもの症状を、「情緒剥奪症候群」と呼ぶ。深刻な症状の子どもは保護者から離し、病院や施設などで治療を受ける必要がある。

「情緒剥奪症候群」の子どもから採血し、成長ホルモンの分泌量を測ると、治療を始めた当初は極めて少ない。そのため心身の発達に支障をきたしたと考えられる。し

愛情遮断性低身長の子どものGH分泌能の経時的変貌



図②

かし、治療の過程で医師や看護師から優しくされ、可愛がられると、成長ホルモンは日を追って増加し、症状も改善していく。— 図②参照 気持ちが「Joie de vivre」になるからである。そして3年ほど経てば、成長ホルモンは安定して正常に分泌されるようになる。

子どもが成長ホルモンを分泌するためには周囲の大人が温かく、思いやりをもって接することが、いかに重要であるかがわかるだろう。

●「Joie de vivre」であることと学びとの相関

「Joie de vivre」であれば、学びにも良い影響を及ぼす可能性が高い。これは、近年の脳科学や生理学の研究によっても裏づけられつつある。

アメリカの生理学者MacLeanは脳の三位一体説を提唱し、人間の脳をその機能によって次の3階層に分けた。— 図③参照

①魚類・爬虫類脳

脳の中枢にあたる間脳・脳幹・脊髄からなり、呼吸や血液循環などの生命を維持す

る機能や身体を動かす機能のみを司る脳である。脊椎動物の中で進化の程度が低い魚類や爬虫類などの脳である。

②原始哺乳動物脳

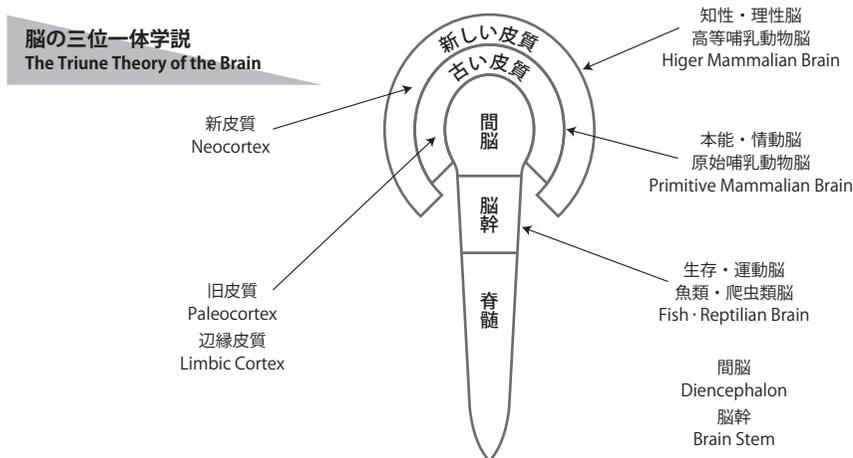
①の外側に発達した海馬、扁桃体、視床下部・上部などの大脳辺縁系からなり、食欲や性欲といった種の保存に必要な情動、さらに喜びや悲しみといった感情を生み、生理機能などをコントロールする機能を司る。原始的な哺乳類の脳が有する階層である。

③高等哺乳動物脳

②の外側、脳の最上層部に発達した大脳新皮質を有する脳で、学習などの知的行動を司る。この階層は、人間や猿、馬などの高等哺乳類の脳にしかない。

このようにMacLeanの研究は、体のプログラムである①、心のプログラムである②、知性のプログラムである③、という具合に、脳が段階的に進化してきたことを示している。

それぞれの位置を見ると、中枢部の①と上層部の③に隣接して②があることがわかる。先に孤児院での体重増加についての研



図③

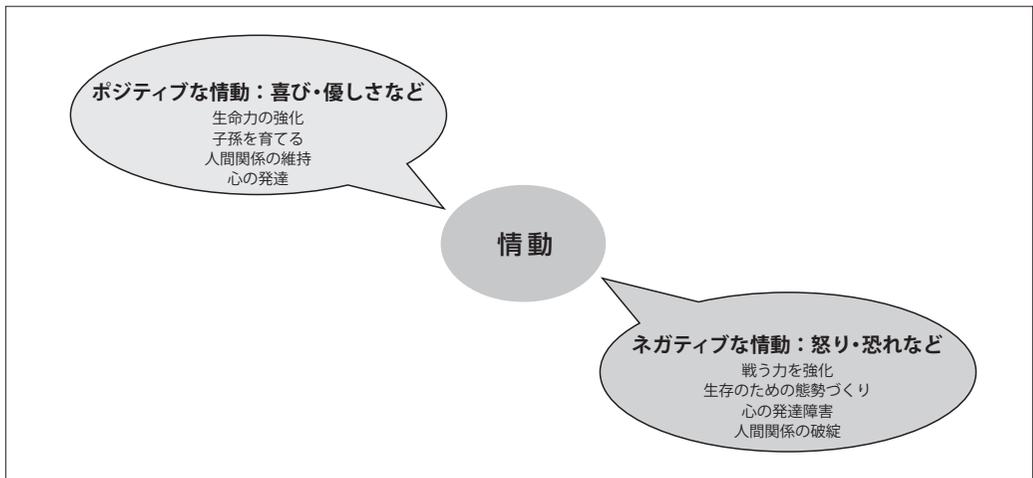


図4

究や「情緒剥奪症候群」の子どもの例で見たように、「Joie de vivre」である子どもの体はよく発達していた。つまり、感情を司る②は、隣接する①の機能、生命維持や運動などの機能に大きく作用しているのである。したがって②が、やはり隣接する③の機能、知性・理性に対しても影響する可能性は高いと考えられる。

また、②が生み、生理機能などをコントロールする感情は、大きく2つに分けられる。—— 図4参照 1つは怒りや恐れなど、いわばネガティブな感情である。苛酷な生存競争を勝ち抜いたり、危険を察知し自分の身を守ったりするためには必要になるが、精神の発達を阻害し、人間関係を破綻させることにもなりかねない。

感情のもう1つは、喜びや優しさなど、いわばポジティブな感情である。心身の健全な発達を促し、人間関係を円満に保つ働きがある。安心して生活するうえで欠かせない感情である。これに満たされた状態こそ、「Joie de vivre」であると言ってよい。

知性を司る③は、感情を司る②に影響するとみられるため、ポジティブな感情を抱く方が、よく学ぶことができると言えるだろう。すなわち、「Joie de vivre」になるこ

とは、学びにとっても効果があると考えられるのである。

● あらゆる子どもが、「Joie de vivre」になれるように

子どもの感情は、周囲の大人の接し方によって大きく左右される。子どもが「Joie de vivre」になるためには、前にも述べたように、大人が優しく、思いやりをもって接することが重要である。他者に対する気遣いなど、社会で生きるために求められる力の基礎を育むことにもつながると、私は考えている。

大人に優しくされ、思いやられることが、子どもの成長にどのように影響するか、子どもはどのようなときに「Joie de vivre」になるか。脳科学などの知見を応用しながら、これらのメカニズムを解明するための学問として、私は「Child Bio-emotinemics (子ども生命感動学)」を提唱し、これを体系化することに力を入れている。あらゆる子どもが心身ともに健康に育っていけるように、今後も研究を続けていきたい。

2-1-3

Playful Pedagogy とは

子どもの「遊び」をはぐくむ保育者： 育ちを見通した「学び」の多様性

秋田喜代美

Akita Kiyomi …………… 東京大学大学院教授



東京大学大学院教育学研究科教授。東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。博士（教育学）。専門は保育学、教育心理学、授業研究。現在、日本保育学会会長、日本読書学会会長、World Association of Lesson Studies, Vice President、日本発達心理学会理事等を務める。日本教育心理学会城戸研究奨励賞、日本読書学会読書科学研究奨励賞、(財)発達科学研究奨励賞等を受賞。著作に、『保育のおもむき』（ひかりのくに）、『学びの心理学』（左右社）、『保育の心理学』（全国社会福祉協議会）など多数。

◎ あこがれ、 夢中になる遊びの経験

充実した遊びの中で、子どもたちは、仲間づくり、世界づくり、そして、自分づくりを行っている。遊びの経験の中で、他者にあこがれ、ものに惹かれ、そして、自分の思い描く世界と一体になって、今の自分とは違うものになりきり、遊び込む。つまり、それは遊びを通して、①他者と出会い、②ものと出会うことであり、夢中になることで、③出来事の中の役や世界に自らを同化し、④見立てやファンタジーの世界に生きるということである。それが乳幼児の育ちの源となる。ある行為を模倣し習得するだけでなく、自分たちでその遊びを⑤持続発展させていくことで、対象とのかかわりや仲間との

かかわりを深め、新たな自己表現へと形を変えていく。これが新しい文化創造となる。遊び込むことで、子どもはもう一つの可能性を日々開いて育っていく。幼稚園や保育園での集団保育における暮らしの中では、さまざまな場面で、振る舞いのかっこ良さや美しさにあこがれ、物や事象のよさや不思議さに惹かれることが生まれている。

近年では、保育に関してさまざまな学術理論や保育原理があり、保育がもたらす、その後の育ちへの効果が実証的に数値で語られてきている。しかし、子どもの経験から保育を考えるならば、安心感や居場所感の中で、文化的に価値あるものに出会い、夢中になり、没頭する時間、その子が生き生きとする時間がより長くあることが、保育の質の豊かさとして最も大事である（秋田ほか、2010）。

● 遊びをめぐる学術的議論 としてのPlayful Pedagogy

近年、遊びこそ乳幼児期の教育のあり方として大事であるということが実証的にデータが提示されて、その効果の有無や要因との関連性をめぐり、海外で議論がなされている (Lillard et als. 2013; Weisberg, Hirsh-Pasek, & Golinkoff, 2013a, b)。その中で、保育者に“Guided play”ガイドされた遊びの有効性や“子ども間の考えを共有すること=sustained shared thinking”など、保育者の役割に目を向けた語りがなされるようになってきている。Guided playは、子どもの自発的な自由遊びと、保育者の教育的意図を伴った指導の間にある保育のあり方の総称として捉えられている。

なぜGuided playが重視されるのかといえば、子どもが夢中になって取り組む方が直接的な指導よりも社会情緒的発達、言語発達等に有効 (Lillard et als, 2013) と考えられるからである。つまり、自由遊びや発見的な学びの要素 (おもしろい、自発性、柔軟性) と、意図的な教授の要素 (外的な目標、積極的な関与) の両方を、Guided playは含んでいる。また、Guided playは、ストレスを低減し、喜び・誇り・自信や社会的絆を育てるとされ (Diamond & Lee, 2011)、子どもの育ちの下ごしらえ (mise en place) をしていると表現する報告もある (Weisberg et als, 2013)。これらは数量的な実験的観察研究に基づく遊びの効果の研究である。さらに、社会文化的活動理論の立場からも、Hedegaard (2012) は、遊びの中では、要求・意図・動機の間で生じる緊張や葛藤から新たな課題が生まれ、子どもがどのようにして、その要求を統合し、折り合いをつけていくのかというところで



図①

学びや発達が生まれると指摘している。年齢により、そのあり方は異なり、保育者への要求、援助として何が求められるのかは変わってくる。

子どもは何かを学ぶために遊ぶのではなく、遊びたくて遊ぶことが大事である。だが一方で、私が大事であると考えてるのは、その遊びの中で何がその子の今にとって“学びの対象”として重要であるのかを保育者が見定めるということである。学びの多様性理論を唱えるLo (2012) は、その理論の中で、①教師が経験させたいと思っていることについての、子どもの理解やかかわりについての多様性、②学びの対象をどのように扱うのかという教師の理解の多様性、③具体的にデザインに対してどのようにガイドしていくのかという行為の多様性の3つを指摘している。同じ遊びでも子どもによる多様性、それらを理解し意味づける保育者の多様性、さらに具体的な行為としての多様性があり、それを自覚することが子どもを理解し実践を理解するうえで大事なことであると考え。—— 図①

● 事例を通して、遊びの中の 学びの多様性を考える

ある子どもが廃材の箱でヘビを作ろうとしている。それを見た子どもたちもまた作

り始める。しかしそれをよく見ていると、廃材はそれぞれ同じ箱がないことから多様性が生まれる。また子どもによって精緻に作ることで満足する子もいれば、大きなところで似た形ができればそれでよしとする子どももいる。それぞれに作りたいヘビのイメージも違っている。そこで興味深いことは、このようなときに子どもたちは、ハリーポッターに出てくるヘビを作ろうとファンタジーの世界に生きると同時に、図鑑でヘビの姿を見て、より本物らしいものにしようと工夫を凝らすことで、科学的な事実にも出会っている。こういうジグザグを認めることが日本の保育の良さであると考えられる。

また、空き箱をできるだけ高く積む運動会の競技「運んでハイタワー」という1つの目標に対して2つのクラスが挑戦していく過程（かえで幼稚園DVDより）を、この学びの多様性という視点から見ると、練習試合を通して皆で協力し合う経験を積む中で、「積む」ことの質に、異なる多様な次元での気づき生まれ、学びが深まっていくことが見えてくる。ここでも、子どもは夢中になって遊んでいる。その夢中な協働の取り組みだからこそ、さまざまな学びが生まれている。挑戦的な活動に不安なく取り組み、その子の可能性が十二分に発揮されることに日々の中での育ちがある。ここで大事なのは、子どもの育ちに足場をかけるのは保育者だけではなく、子ども同士もまた相互に足場をかけ合えるような環境が準備されていることである。海外のGuided playの議論では、足場をかけ導くのは保育者として語られるけれども、1学級定数の大きい日本の保育の良さは子ども同士が高め合える場を十分に準備している点にあるだろう。—— 図②

運んでハイタワーから考える 2クラスの学びの多様性分析		
変わらぬ目標	あおぞら組	太陽組
時間内に箱を積んで高さを競う	変化面と重要な特徴への気づき	変化面と重要な特徴への気づき
最初	積み方：大きい順から積み上げる	グループ間の作戦 踏み台の使用、芯を入れる 支え：長い箱を使って周りを囲む
練習試合 1回目まで	大きい順から積むと偶然風が吹いても箱が残る：勝ち 箱を接着しておく	風で跡形なく倒れる：負け 安定感のある積み方 基礎：1本だとぐらぐらするから基礎の幅を広げる
風でも倒れない		軸：穴をあけて通す。斜めに通すと早い。穴に通すのに時間がかかる。棒はいらない
2回	積む回数：あらかじめ接続した箱を運ぶ方が少なくてよい	
皆で協力して早く積む		
決戦	不安定なものをまっすぐな大きなもので支え安定を図る 大きな支えを作る	頂上部分に少しでもたかさのあるものを積む

図②

● 遊びを支える園の持論

この子どもの姿をご紹介した広島県のかえで幼稚園では、中丸元良園長先生が「できない部分にばかり焦点をあてないで、できる部分・できようとする部分を見ていくと子どもの素晴らしさが見えてくる」「遊びながら“知らず知らずのうちに”いろいろなものが身につくのが幼児教育ですし、そんな“しかけ”がたくさんあるところが幼稚園だといえます。ただし、どんな立派な“しかけ”でも、子どもたちが楽しいと感じて乗ってこなければ、意味がありません」と語っていた。ここには園長の実践に対する持論、保育の原理が語られている。このように実践に埋め込まれた理論としての持論が園で共有されることが大事ではないだろうか。

例えば、東京都品川区の東五反田保育園（2011）では「東五の掟として、①子どもの疑問に答えを出さない、②子どもの考えを否定しない、③関心のない子には直接働きかけない、④止める必要のある行為に対して、その子の気持ちを受け止めながら行為だけを否定する」という原理が導き出されていた。

また、同区西五反田保育園（2013）では「見

守る」ということについて、「0歳児クラスから子どもの意思を尊重すること、意思を尊重するには子どものやりたい遊びをやらせてあげること、子どもがやりたい遊びとは保育者がさせたいことを、こうしましょうと押しつけるものではないこと、そして子どもがじっと見つめる姿・何だろうと思っている表情・やってみたくて動きだしたとき、こんな様子を見守ること」という園長のメッセージを皆が共有し合っていた。

各園の持論を自分たちの言葉で表し、目に見えるようにしていくことが、子どもの具体的な育ちにつながる保育者側の学びの環境になるのかもしれない。保育者は「見とる、見守る、見通す、見定める」という4つの見方をしていくことが大事である。特に見通しをもって、いつどのようにかかわるか、抜けるかを見定めることが実践への即興的な判断となるのである。

◎ 子どもの経験から考える、 保育の環境と活動

子どもが安心して自分を出し、夢中になってかかわるために、私は以下のような環境を保証していくことが大事だと考えている。この図③のような活動や環境が保証されているかを振り返ってみてはどうだろうか。

子どもの経験から考える 保育の活動と環境の質	
<ul style="list-style-type: none"> 安心感・居場所感を保証する環境 	<ul style="list-style-type: none"> 夢中になることを保証する環境と活動
<ol style="list-style-type: none"> 1 身体が休まる 2 一人や仲間内だけで居られる 3 大事に見守られている感覚（温かさ、自然との共生） 4 私、私たちの場の感覚 	<ol style="list-style-type: none"> 1 関わりたくなる 2 利用しやすい 3 続けたいくなる 4 足跡がある
	振り返り見通しができる

図③

最後に遊びについて好きな言葉を紹介したい。

「私たちは年をとるから 遊びをやめるのではない。遊びをやめるから年をとるのだ。」

(ジョージ・バーナード・ショー)

「どんな真面目な仕事も、遊戯に熱しているときほどには、人を真面目にし得ない。」

(萩原朔太郎)

子どもの遊びを支える大人の遊び心、共に遊ぼうとする気持ちを大事にすることが、遊びを導くという発想よりも大事ではないだろうか。

「遊びをせんとや生まれけむ

戯れせんとや生まれけむ

遊ぶ子どもの声聞けば

我が身さへこそ動がるれ」

『梁塵秘抄』

そこに日本の遊びの哲学があるように思う。

参考文献

秋田喜代美・芦田宏・鈴木正敏・門田理世・野口隆子・箕輪潤子・淀川裕美・小田豊(2010)

『子どもの経験から振り返る保育プロセス』幼児教育映像制作委員会事務局

Lillard et als. (2013) The impact of pretend play on children's development:A review of the evidence. Psychological Bulletin,139 (1) ,1-34.

Diamond & Lee (2011) How can we help children succeed in the 21st century?

The scientific evidence shows aids executive function development in children 4-12 years of age. Science,333,959-964.

Hedegaard,M. (2012) Analyzing children's learning and development in everyday settings from a cultural-historical wholeness approach. Mind, Culture and Activity,19,127-138.

Lo,M. (2012) Variation Theory and the Improvement of Teaching and Learning. Gotheborgs universitet.: Acta Universitatis Gotheoburgensis.

Weisberg, Hirsh-Pasek, & Golinkoff, (2013) Guided Play;Where curricular goals meet a Playful Pedagogy. Mind, Brain and Education,7 (2) ,104-112.

2-1-4

Playful Pedagogy とは

「遊び」と「教育」の板挟み

～幼児のGuided play (誘導的遊び) への理解～

朱 家雄

Zhu Jiexiong …… 華東師範大学名誉教授



中国教育学会常任理事、学術委員、環太平洋地区学前教育研究会 (PECERA) 中国大陸委員会主席。『Early Years』など6つ余りの国際学術雑誌の編集委員を務める。学術研究と教育の主な分野は、就学前教育の基本理論、幼稚園カリキュラム等。これまでに主宰した各種のテーマ研究は多項目にわたり、発表した著作・翻訳・教材は数十種類、論文は100以上に上る。省・部レベル以上の賞を多数受賞しており、国务院の特別助成を受けている。

朱家雄学前教育研究：<http://www.zhujx.com/>

● 遊びを通して学ぶ力 子どもはもともと備えている

幼児教育において、保育者は子どもの遊びにかかわるべきか否か。これについての議論は以前から世界中で繰り返し行われてきたし、今後も続くだろう。簡単には答えを見いだせない難しい問題であり、非常に重要な論点であるからである。今回、改めて考察したい。

初めに確認しておきたいのは、たとえ大人がかかわらなくても、子どもは遊びを通して学んでいくということである。

アメリカの幼児教育研究者Rhoda Kelloggは、世界各国の2歳頃から6歳頃までの子どもが描いた150万枚以上の絵を観察し、大

半の子どもは保育者から指導されなくても、自然に絵を描く力を発達させていくことを明らかにした。図①に見られるように、どの子どもも年齢が上がるにつれて、なぐり描き、点と線とを交えた図形、人の顔の正面、人の全身の正面というように、表現力を段階的に高めていく。さらに、4～5歳



図①

頃になると動物を横から描けるようになる。

— 図②参照

粘土細工や積み木でも、子どもが保育者の手を借りることなく、心身が発達するのに従って次第に複雑な形を作るようになることをさまざまな研究者が報告している。

— 写真①②

● 保育者がかかわった方が子どもの成長は促される

前節で見たように、子どもは遊びを通して自然に力を身につけていく。では、保育者は、子どもの成長にどのようにかかわるべきだろうか。自由に遊ぶ子どもをただ見守ればよいのだろうか。あるいは、何らかの形で遊ぶ子どもに手を差し伸べるべきなのだろうか。

1980年代の欧米では、子どもが自然に成長することを尊び、保育者や教師はなるべく子どもにかかわらないようにしようという意見が研究者の間で強まった。しかし、現在では、保育者や教師が子どもにかかわることが多くの国で重視されつつあるし、私も重視すべきであると考えている。自然な発達にただ任せるだけでは子どもの力の伸びには限界があること、換言すれば、保育者や教師がかかわった方が子どもの力が伸びることがわかってきたからである。

図③には、3歳6か月の子ども数人が描いた絵を掲げている。左は保育者から何も



写真①

自由な状態で
子どもの発達レベル



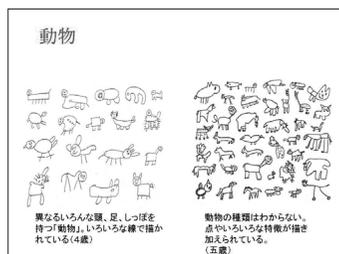
写真②

教えられなかった子どもが自由に描いた絵、右は保育者の指導を受けた子どもが描いた絵である。右側の絵、保育者による指導のもとに描いた子どもの絵の方が、複雑な表現がなされている絵、言い換えれば、客観的に上手な絵とすることができるだろう。

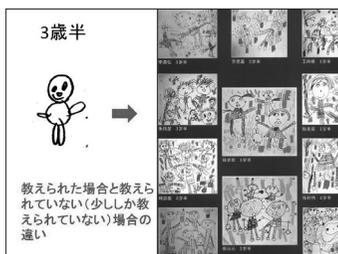
どの年齢の子どもの絵を観察しても、保育者に教えられた子どもの方が、教えられなかった子どもよりも複雑な、いわゆる上手な絵を描いている。つまり、子どもの個人差によってではなく、大人からの指導の有無によって表現する力に違いが生じているということである。

これは、粘土細工にも積み木にも当てはまる。— 図④参照 すなわち、子どもが1人で取り組むよりも、保育者の指導のもとに取り組んだ方が、いっそう複雑な、巧みな表現ができるのである。

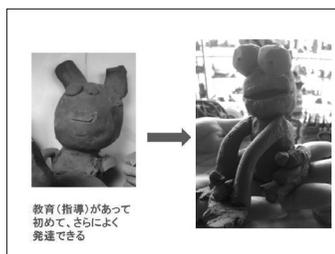
ただ、子どもが自分の力だけで描いた絵、作った粘土細工や積み木の方が良いという意見も、幼児研究者の間には根強く存在する。それこそが子どもの真の自己表現であり、保育者の手など借りずに、自然に自分



図②



図③



図④

の力を伸ばしていくことに大きな価値を見だしているのである。

このように、子どもが独力で作った作品と保育者の指導を受けて作った作品の、どちらが好きか、どちらが子どもの作るべき作品かは、論者の抱く幼児教育観によって大きく異なる。もっとも、保育者の指導のもとに完成した作品の方が高度な表現がなされるということは、どの幼児研究者にも共通する見解である。そのことを示すエピソードを紹介しよう。

中国では、伝統的に保育者が子どもの遊びにかかわっている。子どもが自由に遊ぶことを重視する伝統を持つ、アメリカやイギリスなどの幼児研究者でも、中国の子どもが保育者の指導のもとに描いた絵、作った粘土細工や積み木を見ると、誰もが目を見張る。そして、「まるで芸術品のようだ」と口を揃える。つまり、異なる教育観を抱く論者からも賞賛され得る、客観的な特徴を備えているということである。保育者による指導の成果が大きいことがわかるだろう。

子どもはもともと大きな力を持っている。それをさらに伸ばすためには保育者の力が必要だと、私は考える。すなわち、保育者は子どもの遊びをただ見守るだけではなく、遊びに手を差し伸べるべきなのである。

では、保育者はどのように手を差し伸べたらよいのだろうか。次節ではこれを検討したい。

● 保育者が子どもの遊びにかかわる際重視すべきポイントとは

保育者が子どもの遊びにかかわるにあたって心がけるべきことは、まず、子どもの意思を尊重することである。

アメリカの幼児教育研究者Rhoda Kellogg

による子どもの描画の研究などを挙げて前述したように、子どもは保育者がかかわらなくても、遊びを通して自然に多くのことを学ぶことができる。これは、自由に遊ぶことが楽しいからであると考えられる。楽しめる環境があつてこそ、子どもは学び得ると言っても良いだろう。したがって、子どもの意思を考慮せず、保育者の考えを押しつけるような指導をしても子どもは何も学ばないと考えられる。

指導する目的を持つことも、大切である。子どもにとって最も身近な社会人の一人である保育者には、知識と社会性を子どもにしっかり伝える責任もある。したがって、子どもの遊びにただかかわるのではなく、その遊びを通して、子どものどのような力を伸ばしたいのかをしっかりと考えるべきである。

子どもによって、興味を抱く対象などは異なるため、保育者には、子ども一人ひとりの個性に応じて、何の遊びによってどのような力を伸ばすのかなどをしっかりと計画して行ってほしい。6歳頃からは就学への準備として、ある子どもには読み書き、別の子どもには計算というように、子ども一人ひとりの適性に合った教科学習を見つけ、それに取り組むよう促すことも重要になるだろう。

このように保育者には、あくまでも子どもの主体性を尊びながら、自分の立てた目的に沿って子どもを導く遊び、つまりGuided playを行うことが求められるのである。

また、現代は通信技術の開発が進み、自分の部屋にいながらにして世界中の情報が手に入る。そのため、現在の子どもは、私の子どもの頃、あるいは保育者の子どもの頃よりもずっと多くの情報に触れている。時代の違いを考慮し、Guided playにも新しい要素を取り入れるべきであると、私は考える。例えば、保育者の指導のもと、子どもがiPadを使って

行う遊びなどである。今も今後の社会でも求められる、情報通信機器を使う能力を鍛えることにもつながるだろう。

◎ 子どもはGuided playを通して大きな達成感と自信を得られる

保育者によるGuided playによって、子どもの表現力が伸びるだけでなく、挑戦しようという子どもの意欲も高まると考えられる。これについて、積み木を例に考察してみよう。図⑤を見てほしい。右上の写真は子どもが保育者の教えを受けずに作ったヘリコプター、左の写真は同じ子どもが保育者の指導を受けて作ったヘリコプターである。

右のヘリコプターは単純な構造だが、完成させたとき、子どもは達成感を得ただろう。そして、「もっと大きく、実物に似せたヘリコプターを作りたい」という気持ちも抱いたはずである。もっとも、それを実践しようとしても、子どもだけの力では、構造がずっと複雑な左のヘリコプターを作るのは難しい。挑戦してもうまくいかないだろうから、そのまま保育者が何もしなければ、子どもが自信を失うことにもなりかねない。

しかし、保育者がアドバイスをしたり、一緒に積み木に取り組んだりすれば、子どもは左のようなヘリコプターを作ることができる。子どもは背伸びをして頑張ってい

るだけに、作っている過程で味わう興奮、完成時の達成感は、右上のヘリコプターを作ったときよりも何倍も大きいだろう。

これを繰り返していけば、子どもは表現力を伸ばすのはもちろん、努力したり工夫したりする楽しさを味わいながら、「やればできる」という自信をつけられるに違いない。何事にも立ち向かおうとする気持ちにもつながるはずである。

◎ Guided playによってこそ子どもの力は最大限に伸びる

どの子どもも、大人が想像するよりも多くのことを自然に学んでいる。Guided playは、子どもが生まれながらに持っている大きな力をもっと発揮できるようにするための手助けであると言えるだろう。

ただ、保育者が子どもの遊びにどの程度かかわるかは難しい問題である。かかわる割合は、少なすぎると子どもの力の伸びが少なくなるし、多すぎても子どもの自主性を損ね、やはり子どもの力は伸びにくい。また、前にも述べたように、人間には一人ひとりの個性がある。保育者が強くかかわった方がよい子どもも、保育者があまりかかわらない方が力を伸ばせる子どももいるだろう。したがって、保育者には、子どもの自主性を尊重しながら、自分が適切に子どもにかかわれるように、何を、いつ、どのように教えるかを、目の前の子どもに応じて考えることが求められる。

このように、子どもの自主性と保育者の指導のバランスについて、どの子どもにも共通する指標を見いだすのは困難である。幼児教育の永遠の課題と言っても過言ではないだろう。子どもに対する保育者のかかわり方についての議論は、簡単に答えを出せないと、私が冒頭に述べた所以である。



図⑤

2-2-1

シンポジウム：東アジアの現場

国定基準からみた 台湾の幼稚園における「遊び」の位置づけ

翁麗芳

Wong Leefong …… 国立台北教育大学教授



教育博士、国立台北教育大学幼児と家庭教育学学科教授。現在は台湾の教育部幼保一元化以降における保育者の免許制度研究の課題責任者を務める。台北市で就学前教育の教員養成に携わりながら、幼稚園評価、養成プログラム評価のため、毎月1回台湾全島および離島へ出向き、現場指導を行う。台湾の早期教育過熱現象を、親・教育者・行政の3つの角度から観察、グローバル時代における子どもの教育とケア政策のあり方を研究テーマとしている。共著に、『子育て支援の潮流と課題』（ぎょうせい）など多数。

● 幼稚園と託児所が一元化され、「幼稚園」になった

台湾の近代的な幼児教育は、日本統治下の1897年に幼稚園がつくられたことに始まる。ここから1945年までは、遊びを通して子どもを育てるという日本的な幼児教育が行われていた。1945年以降は、保育者が子どもを教え導くという中国的な幼児教育が国民政府によって行われている。ただ、遊びを尊ぶ気質も残っているため、日本の特徴と中国的特徴の両方を備えていると言うことができよう。

台湾では2012年1月に幼稚園と託児所が一元化され、「幼稚園」となった。これに伴い、幼稚園を管轄する機関である教育部では、近年の幼児教育、特に私立幼稚園での

教育が保育者による教科学習指導に偏っていたことを反省し、遊びを充実させながら、子どもの主体性を尊重した学びを進めようとしている。「遊びの中で学ぶカリキュラム」「生活に即したカリキュラム」「課題設定型カリキュラム」などが策定されたことは、その表れであるといえるだろう。

幼保一元化を実現するにあたり、教育部は、保育者の指導、教具や玩具、図書の質と量などについて40以上の国定基準を設け、1～5年に1回、これに照らしてすべての幼稚園を評価するようになった。——表①参照

「基礎評価」「專業認定評価」「追跡評価」の3つがあり、後二者は「基礎評価」を通過して初めて受けられる。——表②参照

「基礎評価」を通過しなかった幼稚園については、一定の改善期間を置いてから再評

表① 幼稚園に関する法令の例

法令名	概要
幼稚園教保活動課程暫行大綱	幼稚園教育の基本原則を定めている。日本の幼稚園教育要領や保育所保育指針に相当する。発達心理学の研究者らが中心となって作成
幼稚園教保服務実施準則	幼稚園の始業・終業時刻、休暇期間などを定める
幼稚園評鑑辦法	全ての幼稚園が国定基準による評価を受ける必要があることを定める
教育部幼稚園課程与教学品質評估表	幼稚園のカリキュラムや教育の質についての評価指標。台北市立大学の幼児教育の研究者が作成

表② 幼稚園に対する評価

評価名	概要
基礎評価	設立経営、財務管理、教育とケア活動、人事管理、飲食と衛生管理、安全管理などを評価
專業認定評価	園務リード、資源管理、教育とケア、活動過程、評価及び指導、安全と健康、家庭と地域などの類別のうち、幼稚園の教育とケアという専門性の質に当てはまる項目について評価
追跡評価	基礎評価の未通過項目に対する追跡評価

価を行い、それでも改善されていなければ、処罰の対象となる。

私は、学びにおいて遊びは重要な意味を持つと考えている。そのため、教育部が遊びを重視する方針を打ち出したことを、台湾の幼児教育が一步前進したと評価する。ただ、多くの保護者は、教科学習に力を入れてほしいという気持ちを依然として強く抱いているようである。また、教育部の方針では遊びに保育者が介入する割合が高く、私は子どもの自主性をもっと尊重してもよいのではないかと感じるが、評価制度がある以上、それを実行するのは難しいに違いない。

このように台湾の幼児教育には課題もあると、私は考えている。以下、幼稚園でどのような学びと遊びが行われているか、具体例を挙げながら見ていこう。

● 多くの保護者は教科学習指導を望んでいる

保護者は、幼稚園に対して何を期待して

いるか。まず、これを検討してみたい。

台湾の有力紙『聯合晚報』の幼稚園の授業に関する記事(2012年9月10日付)を紹介しよう。台北市のある公立幼稚園では、2012年度、4歳児と5歳児の合同授業のカリキュラムを2011年度のカリキュラムと同じにすることにした。「幼稚園とは知識ではなく技能を学ぶ場所であり、小学校などと違って授業に一定の進度を設ける必要はない」「カリキュラムが同じであっても、例えば切り絵であれば、4歳児は手で紙をちぎり、5歳児は鋏で紙を切るというように、活動の内容を変えればよい」という教育部の方針に沿ったためである。ところが、同幼稚園の5歳児の保護者からは、「5歳児が4歳児の時と同じ授業を2年間続けて受けることになる」「5歳児には新しいことを学ばせてほしい」といった不満が聞かれるという。

一方、公立幼稚園に比べれば教育部の指導から自由になれる私立幼稚園では、4歳児は4歳児のカリキュラム、5歳児は5歳児のカリキュラムというように、年次ごとに学習内容を分け、授業にも一定の進度を

設けている。教育部はこれを幼児教育として正常ではないと見て、今後改めるように指導していくとしているが、保護者には私立幼稚園の教育の方が好ましいと考える人の方が多く、私は感じている。複数の年次で同じカリキュラムに取り組むことがある公立幼稚園の教育を「冷めたチャーハンの温め直し」と揶揄した言葉が、保護者の間で流行しているからである。

これらの例からは、教科学習を重視してほしいという保護者の心情が強いことが見て取れるだろう。

● 幼稚園でも教科学習指導は依然として続いている

幼児教育の方針を遊び重視にするという教育部の方針転換は、教科学習指導を否定することを意味しない。そればかりか、教育部は、教科学習指導についてはこれまで通り高い水準を維持していくとしている。そして、実際、どの幼稚園にも保育者による教科学習指導は多く見られるし、保育者がどのような教育に力を入れて指導すべきかも法令で定められている。

例えば、「語文」、言語教育である。都市部の幼稚園では台湾の公用語である北京語の学習指導、山間部の幼稚園では、北京語だけでなく、閩南語や客家語など、その地方の民族の母語の学習指導にも熱心に取り組んでいる。保育者と保護者が子どもに絵本を読み聞かせるイベントや、保育者による子どもの毎日の活動記録なども、都市部、山間部を問わず大半の幼稚園で行われている。こうした教科学習指導に対しては、保護者の満足度は高いと考えられる。

また、私は授業を見学していて、保育者の学習指導力は私立幼稚園よりも公立幼稚園の方が高いと感じる。公立幼稚園の保育

者は全員が政府機関採用試験の合格者、つまり国家資格保有者であるが、私立幼稚園の保育者には国家資格を持たない人もいることが、学習指導力に表れているのかもしれない。

教育部は、保育者が大学などに通学し、国家資格を取得できるように、私立幼稚園に補助金を支給するようになった。私立幼稚園の教育全体の質を高めようとしているのであろうが、保育者の学習指導力を高めようというねらいも大きいのではないだろうか。

● 台湾と日本との幼児教育観の違い

子どもは自主的な遊びを通して多くのことを学び、心身ともに成長していく。これは、今や多くの国で幼児教育に携わる者の共通認識である。台湾の保育者も、なるべく子どもの自主性を尊重したいと考えている人が大半であることを、私は研究を通して知っている。

ただ、先にも述べたように、国民政府は、従来、保育者が子どもを教え導く幼児教育を進めてきた。そのため、保育者の重要な役割は「教学」、つまり授業であり、これを上手に行うことができこそ立派な保育者であるという幼児教育観は、保育者の間にも根強く存在する。

例えば、台湾の幼児教育が重視することの1つ、道徳・品格教育を見てみよう。子どもが道徳や品格の大切さを学べるような寓話などを載せた学習用の絵本がたくさん出版されており、これを保育者が子どもに読み聞かせる幼稚園が多い。読み聞かせた後、保育者は、絵本の内容について道徳的に良いこととは何か、悪いこととは何かを子どもに尋ねる。そして、子どもが正しく

答えられれば、それで道徳・品格教育をしっかり行ったと考えることが多いと、私は感じている。

伝統的に子どもの自主性を尊ぶ日本では、保育者は、遊びや子ども同士のトラブルなどを通して、すべきことやすべきでないことに子どもが自分で気づけるように促すのではないだろうか。

また、どの幼稚園でも保育者と子どもとの集団



図①

討論がさかに行われている。—— 図①参照
遊びの中で何に気づいたか、明日はどのような遊びをするかなどについて、子どもが自分の考えを述べてから、必ず保育者がまとめる。子どもは自由に意見を交換しているが、保育者が強くかかわっていることがわかるだろう。

日本の幼児教育では、台湾のような集団討論はあまり行われていないと思う。台湾の保育者の多くは、日本の幼稚園や保育所を見学すると、集団討論をしないことに驚く。そして、「日本の先生方は何もしていないではないか」と口を揃える。台湾と日本との、子どもに対する保育者のかかわり方の違いを象徴しているといえるだろう。

● 幼稚園での遊びは Guided play と呼べるか

ある公立幼稚園の保育者は、学びにおける自主的な遊びの重要性を十分に認識しながらも、それはあくまでも理想であるとして、次のように述べる。「何を使ってどのように遊ぶかなど、遊びの内容も仕方もすべて子ども自身が決めた方が、遊びを通して

得られる気づきは大きくなるでしょう。自由遊びこそ、理想的な遊び方であると、私は考えます。ただ、子どもの力を伸ばすためには、保育者による系統的な指導が必要なのではないでしょうか」と。つまり、保育者は意図的に遊びをガイドしているということである。これは、公立、私立を問わず、あらゆる幼稚園の保育者に共通する見解であると、私は考えている。

このような幼稚園での遊びは、Guided playなのかどうか。その判断は難しいが、私としてはGuided playと呼ぶことに違和感を覚える。子どもに対する保育者のかかわり方が強すぎると思うからである。ただ、Direct instructionと呼ぶにはかかわりが弱いだろう。台湾の幼児教育における遊びの特徴をしっかり把握できるように、今後さらに研究を続けたいと考えている。

2-2-2

シンポジウム：東アジアの現場

「遊び」を通して「学ぶ」： ～教育神経科学の視点から～

周 念麗

Zhou Nianli …… 中国華東師範大学教授



華東師範大学就学前教育学部心理研究室主任、教授。1995年にお茶の水女子大学心理学士号、1998年に東京大学大学院教育学修士号、2003年に中国華東師範大学心理学博士学位を取得。2004年6月～12月、米国Arizona State University客員研究員として乳幼児の情緒発達、2006年5月～2007年3月、国際交流基金フェローとして名古屋大学で統合保育について研究。研究領域は児童心理、親子関係、0～3歳児の多元知能の測定と育成方案。主な著作は、『就学前児童の発達心理学』『就学前児童の心理健康と指導』『自閉症児の社会認知—理論と実験研究』『就学前特殊児童の統合保育における比較と実証研究』『0～3歳児の多元知能の評価と育成』など。

● 都市部に見られる 幼児教育の変化

近年、中国では幼児教育の仕方に変化が見られる。1949年の建国以来、旧ソ連の教育思想の影響のもと、保育者による教え込み型の幼児教育を行ってきたが、1990年代末頃から子どもの自発的な学びを重視する教育理念が幼児教育研究者によって紹介されるようになった。これを支持する保育者には、従来の教科学習指導から、子どもが遊べる環境をつくり、子どもを見守り、支援することへというように、保育者の役割をも変えていこうとする動きが見られる。

保育者の役割の変化は、上海などの都市部の保育所・幼稚園に既に現れている。保育者は教科指導を行う割合が低くなり、子

どもの自主性を尊重しながら、遊びのガイド、Guided playを行う割合が高くなっているのである。

● どのようなGuided playが 中国で行われているか

中国のGuided playでは、保育者の立てた教育目標に沿って、教室や屋外の敷地にそれぞれ遊びのコーナーを設け、そこにさまざまな関連遊具を置くことが多い。好きな遊具を用いれば、子どもはもっと楽しく遊べるように自分で工夫するため、保育者に与えられた遊具をただ使う場合に比べて、子どもの気づきや学びが何倍にもなると考えられる。

Social pretend play（社会的なごっこ遊び）は、中国のGuided playの特徴の一つで

ある。これは、病院や銀行、スーパーマーケットなど、社会生活でよく利用する場所を保育者が段ボールなどで幼稚園の教室に再現し、そこで子どもが行うごっこ遊びで、都市部のほとんどの保育所・幼稚園が幼児教育に取り入れている。—— 図①参照

社会的なごっこ遊びの舞台として教室に再現されている場所について検討しよう。先に挙げた例のうち、病院で見られるのは金銭の間接的な授受関係だけである。しかし、それ以外は全て商取引を行う場所、つまり金銭の直接的な授受関係が見られる場所である。こうした場所が遊びの一環として多くの保育所・幼稚園で再現されているのは、政府の経済政策を反映しているのではあるまいか。すなわち、社会的なごっこ遊びが行われていることは、1970年代末から改革開放政策を展開し、全国的に経済を非常に重視してきたことと密接な関係があると、私は考えているのである。

● 子どもは社会的な ごっこ遊びを通して多様な 人間関係を仮想体験する

保育者による指導が中心となる従来型の幼児教育と比べて、子どもの自主性が尊ばれる社会的なごっこ遊びには、どのような利点があるのだろうか。以下で教育神経科学の知見に基づいて解析したい。

まず、子どもの大脳敏感期における利点を見ていこう。敏感期とは、大脳組織や機能が特定の外部刺激に対して非常に敏感に反応する時期を指す。この時期に経験したことは、大脳の神経回路の仕組みと機能を強固に、また精密にする。そのため、大脳敏感期の子どもが社会的なごっこ遊びを行えば、ごっこ遊びで設定される場面を持つ社会的意味、つまり、人間関係や商取引、



図①

金銭の授受関係などを理解しやすくなる。これは、将来社会に適応するための基礎にもなるだろう。

次に、子どものミラーニューロンの発達を促すという利点がある。ミラーニューロンは大脳の神経細胞の1つで、他者の行動を参考にし模倣するという人間の動作を司っていると考えられる。1992年、イタリアの脳科学者Giacomo Rizzolattiの研究グループは、サルの下前頭回 (F5領域) についての研究を通して、サルが目的を持ってある動作を行ったり、動作に関連する音が聞こえたりした時に下前頭回 (F5領域) の一部の神経細胞に放電現象が起きることを発見した。さらに研究したところ、この放電現象が起きる細胞には、観察者の大脳内に他者の動作を鏡のように映し出す機能があることがわかり、ミラーニューロンと命名された。社会的なごっこ遊びでは、子どもは大人の動作を模倣することに努めるから、ミラーニューロンはそれだけ刺激を受けることになり、発達も促されると考えられる。

続いて、子どもの大脳の、言語に対する感覚と数に対する感覚の発達を促すという利点について、2つの側面から考えてみたい。

人間にはブローカ野と呼ばれる脳領域があり、動作の模倣と言語コードの両方にかかわっている。このことは、動作模倣と言語理解の間に密接な関係が存在することを

示している。まず動作を模倣し、音声、語調を含む言語模倣へと進むというように、子どもの発達過程を推論することもできる。これが、1つ目の側面である。

また、子どもは生来、system of number sense（数感覚系統）を有しており、これが数字と数値に関連する知識の基礎をなすと考えられる。アメリカの脳科学者Christine TempleとM. I. Posnerの研究によって、低年齢の子どもが大人と同じように頭頂葉を用いて数字の比較問題を解こうとしていることが明らかになった。Christine Templeによる、脳波を用いた別の研究では、5歳児が、4は5より大きい小さいかといった数の対比についての問題に取り組む時、頭頂葉の皮質が大人と同じように活性化していることが解明されている。これが、2つ目の側面である。

以上から、子どもは社会的なごっこ遊びを通して、言語交流と貨幣交換についての認知を高め、さらに大脳の言語と数に対する感覚の領域の機能も発達させていると考えられる。

最後に、幼児の「社会脳」を発達させるという利点について考察したい。「社会脳」とは、社会とのかかわりの中で、他者の目的や意図、信念、推測などを理解したり、観察したりする情報処理の機能を司る、社会認知の神経ネットワークであり、主に前頭葉眼窩部、側頭回、および扁桃体が含まれる。「社会脳」には、社会情報処理システム（ventral social-affective processing system, VSAPS）という領域があり、「社会脳」も人類社会のネットワークのように、大脳の中の各領域に分布して人間関係が互いに影響しあうネットワーク処理作用を受け持っている。社会的なごっこ遊びを通して、子どもは、銀行という場が設定されれば銀行員と顧客、病院という場が設定され

れば医師や看護師と患者というように、それぞれの場での人間関係を仮想体験することになる。他者の心の中の期待や感情を読み取る体験が求められるため、社会的なごっこ遊びは「社会脳」の発達を促すと考えられるのである。

◎ Guided playを中国全域に普及させていきたい

中国の幼児教育が保育者による指導からGuided playに変わることを、私は歓迎する。ただ、今のところ、変化が見られるのは都市部の保育所・幼稚園に過ぎず、農村部では大半の幼稚園では机に向かって算数や文字を学ぶといった指導型教育が行われている。— 図②参照 — この二極化を解消し、中国全体にGuided play、特に社会的なごっこ遊びを広げていきたい。

また、山間部への遠足や樹木の栽培など、自然を活用したGuided playも普及させるべきであると、私は考える。子どもが生命の尊さに気づいたり、自然科学に興味を持つようになったりするきっかけになるからである。しかし、自然環境に恵まれた農村部でさえ、こうしたGuided playを行う保育所・幼稚園は少ない。あらゆる子どもが秘めている、無限の力を引き出すために、今後、充実させていきたい。

農村部の幼稚園教室の風景



図②

2-2-3

シンポジウム：東アジアの現場

「あー、楽しかった！ 明日もまた遊びたい！」 という保育を目指して

－若手保育者の「保育観と保育実践の差異」に関する調査から－

入江礼子

Irie Reiko …………… 共立女子大学教授



共立女子大学教授、OMEP（世界幼児教育・保育機構）日本国内委員会常任理事。専門は幼児教育・保育学。お茶の水女子大学大学院家政学研究科児童学専攻修了（家政学修士）。幼稚園教諭、母子愛育会家庭指導グループ（現愛育養護学校幼稚部）保育者を経て家庭に入る。3人の子育て後、保育士養成・幼稚園教諭養成大学等で教鞭をとる。現在、共立女子大学家政学部児童学科教授。主要著書に『育児日記からの子ども学』（共著、勁草書房）、『親たちは語る』（共編、ミネルヴァ書房）、『乳児保育』（編著、相川書房）など。

◎はじめに

保育とは、「あー、楽しかった！ 明日もまた遊びたい！」という時を紡ぎだすことであると言っても過言ではないだろう。保育者は、このように子どもたちが希望をもって、明日へと向かう姿を胸に刻みつつ、子どもたちとの生活を共にしながら「今」を充実させることに心を傾ける。

しかし、保育者であれば誰もがそのような時を紡ぎだすことが可能なのだろうか？ 保育の現実にも目を向けると、保育の理想と保育実践には多くの乖離が存在する。果たしてその乖離を乗り越える道は残されているのだろうか？ ここでは我が国の保育の担い手である若手保育者に関する「保育

観と保育実践の差異」という調査から、若手保育者が保育と格闘する姿を浮かび上がらせていこうと思う。

◎調査について

本調査は我が国を含むOMEP（世界幼児教育・保育機構）のアジア・太平洋地域5か国（日本、中国、韓国、ニュージーランド、シンガポール）の共同研究“Survey of the Gaps among Teachers’ Beliefs, Pedagogical Knowledge and Actual Teaching Practice”（邦題：保育者の保育観と保育実践における差異について－経験年数2～5年の保育者を中心として－）の一環として実施された。日本における共同研究者は著者を含む7名

(上垣内伸子、小原敏郎、酒井幸子、白川佳子、内藤知美、吉村香、入江礼子)である。この調査に関する報告は2013年7月、中国・上海でのOMEP世界大会におけるシンポジウムで行った。経験年数が2～5年の若手保育者を選んだのは、我が国同様に共同研究に参加した国々の保育においても、若手保育者が保育の大きな担い手になっているという現状があったからである。

◎ 対象者および期間

対象者は都内および近郊の保育者(幼稚園教諭、保育士)。保育者の経験年数は2～5年とした。調査期間は2012年6～7月、著者らが幼稚園・保育所に調査協力を依頼し、質問紙を送付した。その結果、144名から回答を得た。

◎ 調査項目

調査では保育者が大切と思っていること(保育観)と現実のずれを測定する項目を作成した。質問項目は以下のとおりである。

質問1:「日々の保育の中であなたが特に大切だと思っていることはなんですか?」(自由記述で回答)

質問2-1:「質問1でお答えいただいた大切だと思っていることは、現在のあなたの保育においてどの程度行えていますか?」(4件法で回答)

質問2-2:「質問2-1で行えている理由、あるいは行えていない理由について」(自由記述で回答)

質問3:「今より何が変わればより良い保育

が行えますか?」(自由記述で回答)

◎ 分析方法

質問1、質問2-2、質問3の自由記述はKJ法*によって分類した。

* KJ法: データをカードに記述し、カードをグループにまとめて、図解し、論文等にまとめていく方法。

◎ 結果と考察

(1) 質問1

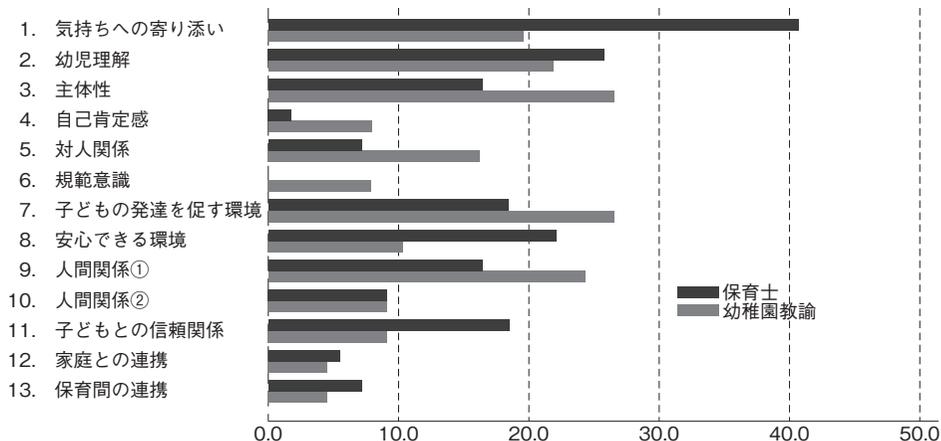
「日々の保育の中で保育者が大切に思っていること」について

自由記述の内容をKJ法によって分類した結果、「子どもへの理解(図①の1.2.)」「発達の諸側面(図①の3.4.5.6.)」「保育環境(図①の7.8.9.10.)」「信頼関係・連携(図①の11.12.13.)」という4つの大カテゴリーと13の小カテゴリーが抽出された。このうち多かった「子どもへの理解」「発達の諸側面」「保育環境」という3つの大カテゴリーは、我が国における現行の幼児教育・保育の枠組みである幼稚園教育要領・保育所保育指針において重要とされていることとも合致していた。

次に、「保育の中で保育者が大切に思っていること」についての幼稚園と保育所の比較を行ったところ、以下のグラフに示される結果を得た。— 図①参照

幼稚園教諭の回答数が保育士より多かったものは「3. 主体性(記述例: 子どもが目的を持ち、主体的に活動すること)」「4. 自己肯定感(記述例: 子どもが自信を持ち、自己肯定感をもてるようにする)」「5. 対人関係(記述例: 子どもが人とのかかわりを通してさまざまなことを経験すること)」

図① 日々の保育の中で保育者が大切に思っていること



「6. 規範意識（記述例：挨拶など基本的な作法を身につけること）」「7. 子どもの発達を促す環境（記述例：幼児の生活に無理のないよう、また経験が偏らないよう、長期的な見通しをもった上で日々の保育を計画し、実践していくこと）」「9. 人間関係①（保育者自身の表情や行動見本）（記述例：あなたのことが大好きだよ、あなたのことを見ているんだよ、と伝わるような優しい表情や言葉かけを意識している）」であった。このなかで「3. 主体性」、「4. 自己肯定感」、「5. 対人関係」、「6. 規範意識」は大カテゴリー「発達の諸側面」に含まれている。このことから、幼稚園教諭は保育士に比して「発達の諸側面」をより大切にしているのではないかと考えられる。

一方、保育士の回答が幼稚園教諭より多かったものとしては「1. 気持ちへの寄り添い（記述例：子どもの気持ちに寄り添い、共感し、励まし、慰め、心の拠り所となるようにかかわること）」「8. 安心できる環境（記述例：保護者と離れて過ごす子どもたちにとって、それぞれの気持ちを受け止めて安心して過ごせるように、人的・物的環境を整えている）」、「11. 子どもとの信頼関係（記述例：子どもの一人ひとりとじっくり応

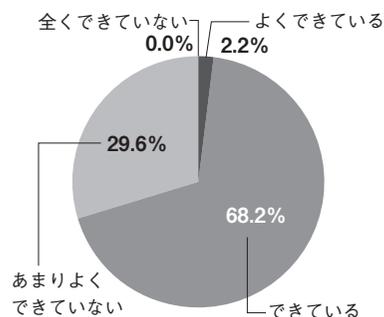
答的にかかわり、スキンシップを図ること）」であった。これらの結果は、保育所保育指針にもあるように保育所保育においては「養護と教育の一体化」が必要であるとされていること、さらに「養護」の部分には「教育」の土台になるため、保育所においてはより重要とされていることを示していると考えられる。

(2) 質問2-1

「保育の中で大切に思っていることを行えている程度」について

— 図②参照

「日々の保育の中で大切だと思っていることを行えている程度」については、「よくで



図②

きている」(2.2%)、「できている」(68.2%)という肯定的回答が合わせて約7割と比較的高く、「あまりよくできていない」(29.6%)という否定的回答の約3割を大きく上回った。

(3) 質問2-2

「質問2-1で行えている理由、あるいは行えていない理由」について

肯定的内容の回答をKJ法でカテゴリー化した。具体的に見ていくと「保育への前向きな意識や取り組み（記述例：自己の保育への思いを意識した実践を心がけている）」、「一人ひとりの理解やかかわり方の工夫（記述例：子どもの発達、個性に応じたかかわりを心がけている）」といった保育者個人の意識という視点をもつものと、「職員の協力体制、園環境の充実（記述例：学年会で実態を話し合い、細かい週案を立てる中で経験内容や援助の仕方を考えている）」などの「組織のあり方」という視点をもつ者があることがわかった。また、行えていないと回答した保育者では、「自己の葛藤や力量不足の認識（記述例：発達が遅れていると思われる子がいて、その子に対しての援助がま

だできていないところがあるため）」、「自分自身の時間や余裕のなさ（記述例：自分の思いと行為とのギャップに不安・葛藤を感じる）」、「職員間や園としての課題」を多く挙げていた。

さらに、幼稚園教諭と保育士で見ると、求める保育の実践が行えている要因としては、幼稚園教諭は、保育者自身の前向きな意識や取り組みを挙げ、保育士は、職員の協力体制、園環境の充実など、職場・園環境の要因を挙げているところに特徴を見いだせた。

(4) 質問3

「何が変わればより良い保育が行えますか？」について

— 表①参照

ここでもKJ法によって自由記述の内容を整理した。その結果2つの大カテゴリー、11の中カテゴリー、27の小カテゴリーを得た。大カテゴリーでは「自己に注目」と「自己以外に注目」に分類されたが、これは、より良い保育を行うためには保育者自身が積極的に変わろうとしている場合と、社会や職場など自分以外の要因に注目して、そ

表①

大カテゴリー	中カテゴリー	出現度数 N=129	(%)
自己に注目	1.ゆとり	23	(17.8%)
	2.連携力(人間関係力)の向上	22	(17.1%)
	3.保育意識の変革	25	(19.4%)
	4.保育力の向上	57	(44.2%)
	5.自己管理	4	(3.1%)
	6.経験を積む	3	(2.3%)
自己以外に注目	7.社会環境の改善	12	(9.3%)
	8.職場環境の改善	24	(18.6%)
	9.子ども環境の改善	5	(3.9%)
	10.保育内容の改善	4	(3.1%)
	11.コミュニケーションの改善	27	(20.9%)

れが変わることが必要だと考えている場合があるということである。中カテゴリーでは「経験年数を積み、教材研究を続け、子どもが必要としている経験について援助できるように手だてを増やしていく」といった内容を持つ「4. 保育力の向上」が全体の半数弱と最も多いことがわかった。保育経験2～5年の保育者にとっては「保育力の向上」が喫緊の課題となっていることがうかがえる。

また、幼稚園教諭と保育士の回答を比較したところ、幼稚園教諭では「保育力の向上」「保育意識の変革」「連携力（人間関係力）の向上」「ゆとり」という回答が多かった。一方、保育士では「コミュニケーションの改善」の回答が最も多く、「職場環境の改善」「保育力の向上」と続いた。両者には「保育力の向上」という共通点はあるものの、幼稚園教諭では自分が変わればより良い保育ができると考えているのに対し、保育士は自分というより職場環境などの「自分以外のもの」が変わらなければより良い保育の実現は難しいと考えていることがうかがえた。

●まとめ

今回の調査で、経験年数2～5年の保育者が自分が大切に思っている保育が行えていないとする割合は3割と比較的少なかった。しかしながら、この層が日本の保育の主要な担い手であることを考えると、これら保育者が抱える課題に対して十分な対応が必要であると考えられる。

これら若手の保育者が、求める保育を実践するためには第一に「保育力の向上」が鍵となる。その他、「コミュニケーションの改善」「保育意識の変革」「職場環境の改善」「ゆとり」「連携力（人間関係力）の改善」と続く。連携については、保育の内部要因である「保

育者」「保護者」「経営者」との連携が必要であるとの記述はあるが、保育を取り巻く外部要因である「保育政策」「社会の保育観」などの改善意識は必ずしも高くない。これは2～5年といった経験年数による結果であるのか、あるいは日本の保育者においては、保育を取り巻く外部要因に対して改善を求める姿勢が弱いのか、今後の、経験年数の比較や国際比較が求められる。

また、幼稚園と保育所という施設種別の比較からは、改善の方法について、幼稚園教諭は、自己に注目し改善に取り組もうとする傾向が高く、一方、保育士は、職場環境などの自分以外の「組織」「園のシステム」の変革を求める傾向が高いことが指摘できた。

2-2-4 パネルディスカッション

シンポジウム：東アジアの現場

panel discussion

司会●塘 利枝子 Tomo Rieko …………… 同志社女子大学教授

パネリスト●

周 念麗 Zhou Nianli …………… 華東師範大学教授

翁 麗芳 Wong Leefong …………… 国立台北教育大学教授

入江礼子 Irie Reiko …………… 共立女子大学教授

朱 家雄 Zhu Jiaxiong …………… 華東師範大学名誉教授

東アジアの 現場から

周念麗先生、翁麗芳先生、入江礼子先生の講演の後、上記3名に朱家雄先生を加えたパネルディスカッションが、塘利枝子先生の司会で行われた。

台湾の幼児教育の 現状について

塘● 最初に、3人の先生方のご講演内容について、会場の皆様から質問をいただければと思います。

Q1 翁先生はご講演で、現在の台湾の幼児教育について、保護者は歓迎しているが、自分は違和感を覚えるとおっしゃっていました。違和感があるのはどのようなことについてでしょうか。

翁● 保育者の指導が強く、子どもの自主性が十分に尊重されているとは言えないことです。

また、保育者の教育目標の立て方も不十分だと思います。例えば、教育部（幼稚園を管轄する機関）の指導により、多くの幼稚園では野菜だけを用いた料理を給食として出す「草食の日」を週1日設けていますが、なぜこの取り組みを行うのか、これによって子どものどのような力を伸ばしたいのかは、あまり検討されていないように感じます。

朱● 私も、翁先生に質問があります。台湾が打ち出した、新しい幼児教育の指導方針には幼稚園の評価基準が細かく設けられており、これに照らして幼稚園が審査されます。以前、アメリカがこれと似た教育政策を行いました。うまくいきませんでした。台湾ではどうでしょうか。

翁● 評価基準を設けることは、幼児教育の質を向上させるきっかけにはなるでしょう。ただ、保育者が審査に合格することばかりを意識し、子どもに目が向かなくなる危険性も秘めているはずですよ。

中国のGuided playは遊び時間の格差を解消する鍵

Q₂ 周先生に質問が2つあります。1つ目は、中国で今、Guided playがなぜ必要なのか。2つ目は、中国がどのような子どもを育てようとしているかということです。

周● 1つ目の質問からお答えします。中国の山間部の子どもは、都市部の子どもに比べて、遊び時間が大幅に短いことがわかっています。地方は高齢化が著しく、両親が共働きである割合も高いため、子どもは保育所・幼稚園から帰宅すると、祖父母の世話をしなければならず、遊ぶ時間がないのです。保育所・幼稚園で過ごす時間はどの子どもにも共通してありますから、ここでGuided playを行えば、限られた時



間に子どもの力を最大限に伸ばせるだろうと期待しています。

次に2つ目の質問、中国が育てようとする子ども像についてですが、これは、今、変わろうとしています。以前は教科学習に長けた子ども、つまり英語や数学の試験で良い成績を収める子どもでした。ところが、グローバル化が進む近年は、多様な価値観を持つ人々と円滑に意思を疎通できるように、コミュニケーション能力や社交性などを身につけた子どもの育成にも、力を入れるようになりました。社会的なごっこ遊びがさかんに行われているのも、このような政府の教育政策の転換を反映していると考えられます。

塘● 周先生に中国でGuided playが求められる理由について考察していただきましたので、入江先生には、日本でGuided playが求められる理由についてお願いいたします。

入江● 私が幼稚園に通っていた1950年代には、友だちと一緒に、近所の小学生であるお兄さんやお姉さんに交じ



って原っぱなどでよく遊びました。その中で社交性を身につけられましたし、ずるいこと、いけないことなども学びました。子ども同士の遊びを通して、良い社会勉強ができたと思います。

ところが、近年は異なる年齢の子どもが集まり、子どもだけで遊ぶ機会が少なくなっていると思います。逆に言えば、あらゆる遊びに大人がかかわることが増えているはずです。すると、大人、保育者はどのように子どもにかかわるべきかが非常に重要な論点になるわけです。

中国・台湾の幼児教育は今後どのように展開するか

塘● 日本の保育者は、子どもがなるべく自由に遊ぶ、言い換えれば子どもの自主性を最大限に尊重したGuided playを行っています。一方、中国や台湾の保育者の行うGuided playは、日本に比べると子どもの自由度が低いようです。

Guided playとは、子どもが生まれながらにもっている好奇心や探究心を伸ばせるように保育者がガイドする遊びです。最も大切なのは子どもの自主性であり、保育者の役割はあくまでも子どもを補佐することにあります。そういう意味では、中国や台湾よりも日本のGuided playのほうが、Guided

playの理想に近いと私は思います。

中国や台湾は、今後、日本のようなGuided playを行うようになるかどうか、翁先生、周先生、予測をお願いいたします。

翁● 台湾の保育者が日本のGuided playを見れば、子どもが自由に遊んでいる姿に目を見張るでしょう。ただ、私の講演でもお話したように、保育者は子どもを教え導くべき存在であるという認識が、台湾には根強くあります。そのため、日本のGuided playの長所を認めながらも、自分たちも実践しようとはしないような気がします。台湾の保育者は、現状でも子どもの自主性を精いっぱい尊重していると考えているはずです。

周● 中国の幼児教育では、この10年ほどの間に、子どもの自主性が尊重されるようになってきていることは間違いありません。幼児教育研究者によって、子どもが遊びを通して多くを学ぶという認識が、少しずつですが確実に、幼児教育の現場や保護者に広がっているためだと考えられます。

panel discussion

2-3-1

遊びの中に学びがある

学習の場としての遊び学習： 子どもの楽育教具と空間デザイン

張 世宗

Chang Shin-Tsung …………… 国立台北教育大学教授



アメリカ・プラット学院 (Pratt Institute) 建築学修士、コロンビア大学芸術学修士、教育学博士、国立台北教育大学芸術及び造形設計学部教授。国立台北教育大学芸術及び造形設計学部の学部長、おもちゃとゲームデザイン研究所長、国立台北師範学院視覚芸術教育センターのセンター長、シンガポールPractice Performing Arts School海外顧問などを担当していた。アイデア教育システムデザイン、クリエート・デザインの研究と教育の他、幼児園と児童博物館などの学習環境のソフトウェア、ハードウェア、ファームウェアの開発と設計に従事し、国立美術館ゲーム室、永和遊芸屋など「楽育」学習空間と国内外数多くの児童ゲームショーの企画と広報に携わる。主な著作は、「楽育」(Edu-tainment)、「遊芸学」など関係論文の他、「玩・遊・戯」、「台湾伝統児童おもちゃ及び智能開発ゲーム」、「伝統科学技術とアイデア楽育」などの本、「玩物尚智」教材シリーズなどがある。

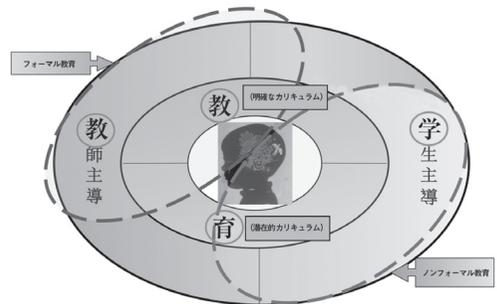
◎ インフォーマル教育の 長所について

「教」と「学」とは相反する概念であると、私は考えている。「教」とは、大人が主導する学習活動である。大人の立てた教育目標と教育計画に沿って学習活動を進めることが、子どもの「学びたい」という意思よりも優先されるため、子どもは学習活動に楽しさを感じるとは限らない。一方、「学」とは子どもが自らの「学びたい」という意思に従って行う学習活動であり、好きなことをしている時、あるいは遊んでいる時のような楽しさを伴う。

「教」はフォーマル教育 (Formal Education)、「学」はインフォーマル教育 (Informal Education) であると言うこともできるだろう。

— 図①参照

フォーマル教育では、学校教育における教師と生徒との関係に典型的に見られるように、大人は子どもに多くの知識を身につけさせることを目指す。効率を重視するため、大人の口頭での説明や子どもに配布する資料を通して、つまり、子どもの聴覚と視覚に訴えて知識を伝達する。子どもは短



図① フォーマル教育とインフォーマル教育の範疇

時間に知識を得られる半面、経験が間接的であるため、得た知識を忘れやすい。

これに対して、インフォーマル教育では、実際に体を動かしたり、手を触れたりすることを通して、子どもが主体的に知識を身につけることを重視する。子どもは知識を得るのに時間がかかるものの、経験が具体的であるため、得た知識を長く残すことができる。

● 幼児期には遊びを通して多くのことを学ぶ

インフォーマル教育の学習活動は、生活のさまざまなところに存在する。幼児期における代表例は、遊びである。幼児期は絶えず外界の影響を受けて学習する時期であり、こうした学習の多くは遊びを通して行われている。

ただ、生活の中で自然に生まれる遊びは自由遊び (Free play) であり、学習効果が高いとは限らない。そこで、大人には、子どもの自主性を尊重しながら、学びを意図した遊びを子どもが行えるように誘導することが求められる。あくまでも子どもが自然に「学びたい」と思えるように誘導するため、フォーマル教育の学習活動ではなく、インフォーマル教育の学習活動であると言えるだろう。

こうした遊びの鍵となるのは次の3つであると、私は考えている。

①遊びの選択

遊びと学習のバランスが保たれた、「有意義な遊び」を選択できるように、大人が子どもを誘導するタイプである。遊びによっては、子どもが夢中になり過ぎて、限界効果が遊びの機能効果に影響を及ぼし、有益な活動を行う機会を排除するような、不利益をもたらすことがある。大人が誘導すれ

ば、これを防ぐことができる。

②玩具・教具の開発

保育者の学習目的に応じて、効果的な学びが得られるような機能性玩具や教具が開発されれば、子どもは遊ぶ楽しさと学ぶ楽しさをともに感じられるはずである。開発にあたっては、保育者が子どものニーズを分析し、それを玩具・教具のデザイナーと共有することが重要である。

③カリキュラム

特定の教育目標のもとにカリキュラムをつくり、それに沿って適切にプログラム化すれば、遊びは、目的のある、系統化され、組織化された学習活動となる。

● 教育と娯楽を融合した新たな教育概念「楽育」

子どもが遊ぶ楽しさを感じながら、より効果的な学びができるようなインフォーマル教育の学習活動について、私は研究を続けている。そして、教育 (Education) と娯楽 (Entertainment) の2つを融合した新しい教育概念、「Edu-tainment (楽育)」を提唱するに至った。台湾では、既に多くの施設で「楽育」が実践されている。

例えば、国立美術館には、子どもが友達と一緒に積み木などの遊具を使って遊べるコーナーを設けている。——写真①参照
遊具は全て、子どもの自発的な探索力や創作力などを伸ばせるように、幼児教育研究者が遊具デザイナーと話し合って製作したものを用いている。

台北市親子センターには、映画やテレビドラマ、演劇の映像をスクリーンに映し、子どもがそれを見ながら舞台上で登場人物になりきって遊べるコーナーを設けている。——写



写真①

真②参照 演技芸術を、子どもが体験できるようにするためである。

このように、インフォーマル教育の1つである楽育では、手を触れる、組み立てる、演じるなど、子どもが体を動かして体感できる仕組みが整えられている。聴覚と視覚による学習に偏ることが多いフォーマル教育よりも、子どもは物事をずっと具体的に、深く、そして楽しく理解できるに違いない。だからこそ、前にも述べた通り、インフォーマル教育による学習では、子どもは学習後も長く、得た知識を身につけていられるのである。

また、楽育についての研究を続けるうちに、子ども同士だけでなく、年齢が大きく異なる者同士が遊ぶことの重要性にも気づいた。子どもと親や祖父母とが一緒に遊べば、子どもは親や祖父母から経験や知恵を学び、親や祖父母は子どもに教えることで、達成感を得られる。互いに交流を深めることにもつながるため、祖父母世代の生活経



写真②

験を孫世代に引き継ぐ方法にもなると考えられる。

● 工夫する楽しさに満ちた遊びを現代によみがえらせる「遊芸屋」

現代では、多くの子どもがパソコンやiPhoneなどのハイテク機器を使って遊んでいる。もちろん、そこで得られる学びも多いただろう。ただ、ハイテク機器が現れる以前の子どもの方が、楽しくなるように自分で遊びを工夫していたように思われる。1950年代、子どもの私の遊び道具は、川原の石や森の枯れ木などばかりだったが、それらを使って遊びながら、さらに面白く遊ぶためにはどうしたらよいかを、友だちと考えていた。

このような子どもの遊び、工夫する楽しさに満ちた遊びと、幼児教育や科学技術といった多方面の知見を統合し、現代に新た

によみがえらせ、さらに充実した楽育を行うことはできないだろうか。この理想を実現するために計画されたのが、玩具の開発・展示機関「遊芸屋」の設置である。

教育界の研究仲間や支援者の協力を得て、台湾新北市永和区に「遊芸屋」第1号館が完成し、すでに営業を始めている。来場者は、展示されている玩具全てを手に取り、遊ぶことができる。——写真③参照 子どもが親や祖父母とともに遊べるようにデザインされた玩具もたくさん展示されている。

展示品で遊べる玩具の博物館は、100年以上前にアメリカで生まれ、次第にヨーロッパや東南アジア諸国に広まった。「遊芸屋」は、台湾におけるその最初の試みである。幼児から高齢者まで「children of all ages(全年齢の子ども)」の学習者が、自分の手で操作したり、創作したりしながら楽しく学べる場である。運営面などの課題を克服し、今後さらに発展させていきたい。

● 幼児教育研究者同士の 国境を超えた交流

近年、各国の幼児教育研究者の間で、遊びを通して子どもを育てることがますます重視されるようになった。例えば、日本では小林登先生と榊原洋一先生が率いるCRN (Child Research Net) は多くの先進的研究を世に問うているし、「東アジア子ども学交

流プログラム」のような、アジアの幼児教育研究者同士の交流の場でも、遊びと学びの関係について白熱した議論が行われている。台湾では、私が楽育を提唱し、「遊芸屋」の運営に参画するようになった。

子どもに、より楽しく、より深く学んでほしい。これは、全ての幼児教育研究者の願いである。話し合いの場や理論実践の場が、国境を超えて広がっていくことを期待する。

参考文献

張世宗 (1993)。『玩・遊・戯智慧の玩具・玩具的
智慧』。台北：太聯。

張世宗 (2002)。『童玩遊藝與兒童文化』。于林文
宝 (編) 之兒童文学与兒童文化學術研討會論文集。
台北：万卷楼圖書出版有限公司。193p-229p。

張世宗 (2012)。『跨代樂育學習場域：社區型全
齡博物館的研究與設計』。国立台北教育大学主催の
『2012樂育樂活樂藝術与設計』国際シンポジウムで
の講演。2012年12月7日。

張世宗 (2013)。『東アジア子ども学交流プログラ
ム報告書2013』。東京：Child Research Net。論文
のタイトル：從玩具到教具；从教育到樂育－童玩的
遊藝研究与应用。2013.3. 43p-50p。

Dewey, J. (1916). *Democracy and education*. New
York: MacMillan.

Monigham-Nourot, P (1990). *Looking at Children's
Play: A bridge between theory and practice*. In
Klugman, E. & Smilansky, S. (Eds.) *Children's play
and learning*. NY: Teachers College.



写真③

2-3-2

遊びの中に学びがある

Playful Learningの情景

All you need is... Love, Passion and Playful Learning

上田信行

Ueda Nobuyuki …………… 同志社女子大学教授



同志社女子大学現代社会学部現代こども学科教授、ネオミュージアム館長。1950年、奈良県生まれ。同志社大学卒業後、セントラルミシガン大学大学院でM.A.、ハーバード大学教育大学院にてEd.M.および、Ed.D.を取得。専門は教育工学。Playful Learningをキーワードに、学習環境デザインとラーニングアートの先進的かつ独創的な学びの場をつくることに力を入れている。著書に『プレイフル・シンキング：仕事を楽しくする思考法』（宣伝会議）、『プレイフル・ラーニング：ワークショップの源流と学びの未来』（共著、三省堂）など多数。

◎ Playful Learningとは どのような学びか

Playfulとは、本気でものごとに関わっている時に感じる、あのワクワク・ドキドキ感のことであり、好きなことをやっている時に感じる興奮と楽しさである。ものごとを楽しくするのではなく、「楽しいことの中に、学びがあふれている」という考え方である。Playful learningとは、自分が周りの世界とどのようにかかわっていけば楽しくなるか、どのようにすれば周りの環境も巻き込んでPlayfulな状況を生み出せるかという考え方、アティチュード（姿勢）、振る舞いのことである。CRNでは、Playfulを「何かに熱中しているときの前向きな気持ち」といった意味に用い、子どもが自発的に学

びに向かうようになるためには、Playful spirit を持つことが大切であると提唱している。

◎ 大人が変化を楽しんでこそ、 子どもはPlayfulになる

子どもがPlayfulになることがいかに重要か。CRNでは1999年度から、このテーマに取り組んでいる。日本ではかなり早くから研究をスタートさせたと言ってよいだろう。

私がPlayful Learningについての研究に取り組むようになったきっかけも、99年にCRNのPlayfulをテーマにしたワークショップ「プレイショップ1999～プレイフル・スピリットを経験しよう！」の企画・運営に参画したことだった。このワークショップ

では、子どもが自主性や創造性を伸ばせるように、「つくって・かたって・ふりかえる」という活動を充実させた。内容についてはスタッフと検討を重ね、ワークショップ開催前日まで変更や微調整を行った。「子どもに最大限のPlayfulを感じてもらいたい」。その一心で夢中になって準備をし、時間が経つのを忘れたことをよく覚えている。だからこそ、ワークショップ当日には多くの子どもの笑顔や楽しそうな表情を目の当たりにすることができたのだと思う。

どうしたら参加者に楽しんでもらえるかを常に考え、状況と対話しながら内容をリアルタイムに変化させ、その場で立ち上がってくるエキサイティングな場に寄り添っていくという主催者の姿勢こそ、Playfulなワークショップを実現するための鍵となる。CRNのワークショップの企画・運営に携わり、私はそう実感した。変化のない、予定調和型のワークショップでは、参加する子どもはもちろん、主催者である大人にもワクワク・ドキドキ感生まれにくいに違いない。

現代は、デジタル化、グローバル化が進み、社会が大きく変化する時代である。変化を楽しもうとする姿勢は、今まで以上に重要となるだろう。

◎ 子どもをPlayfulにする ワークショップの例

近年、私が企画・運営に参画した、Playful Learningをテーマにしたワークショップを2つ紹介しよう。

①「BRICK3.0 ～PLAY PLAY PLAY～」

創造する楽しさを親子で感じてもらうワークショップである。

内容は次の通りである。腕や身体を使ってアルファベットを表すなど親子がさまざまなポーズをとり、その姿をカメラで撮影

し、画像を壁に映写する。親子はブロックで画像をなぞりながら、自分たちの姿を再現する。ブロックは一つひとつのパーツが大きいので、親子は体のカーブなどの細かな部分をどのように表現するかを考えることになる。そして、出来上がったブロックを写真に撮り、その連続した写真を使ってアニメーションをつくる。——写真①参照
子どもは見立ての達人である。この見立てる作業が、どのように創造性をわき立たせるかを考えるための実験的ワークショップである。



写真①

②自動車を楽しみにしよう

自動車メーカーからの依頼を受け、山梨県のキャンプ場で実施したワークショップで、3台のファミリーカーを楽器に変換して、ドアやボンネットを叩きながら演奏し、森の中で大合唱をするというワークショップである。内容を見てみよう。子どもたちが森を散策し、虫の鳴き声、落ち葉を踏む音、川の水が流れる音などをレコーダーに収録する。これをメディアアーティストがコンピュータに取り込み、データ化する。自動車にはセンサーが設置されており、車体に触れると、その情報がコンピュータに送られ、サンプリングされた音が再生される。子どもはこれを楽器とし、自分の歌に合わせて演奏する。演奏の後、子どもには未来の自動車をイメージした絵を描いてもらった。「木をのぼるクルマ」「サッカーのキーパ

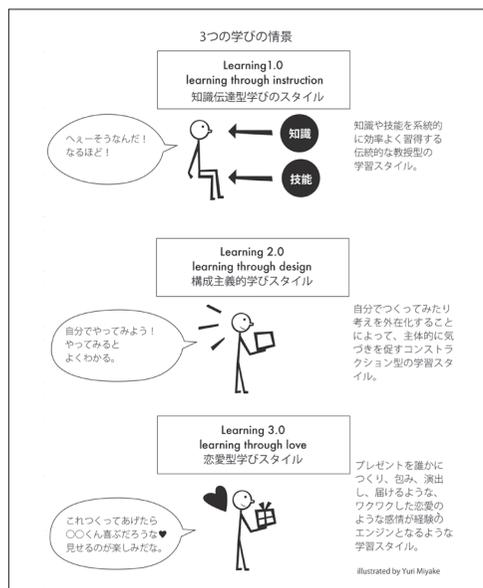
一をしてくれるクルマ」など、どの子どもも自分の夢を見事に表現していた。

この2つのワークショップに限らず、私がワークショップを企画・運営する際は必ず、「楽しさの中に学びがあふれている」ということに子どもが気づき、Playful Learningを体験できるようにデザインしている。子どもの頃を楽しみながら学んだ原体験が少ないと、学びに対して「つらい!」「おもしろくない!」というネガティブなイメージを持ったまま、大人になってしまう。そうならないように、学びの楽しさを小さい頃から経験してほしいと願っている。

子どもに楽しむことこそ大切だと伝えるためには、一緒にいる大人も、心の底から楽しむということが欠かせない。そのため、大人にとっても魅力的なワークショップを心がけている。

● Playful Learningを実現する3つの学びの情景

学びにはさまざまなスタイルがあるが、3つの情景に分けて考えるとイメージが



図①

しやすい。それらは、①learning through instruction、②learning through design、③learning through loveである。—— 図①参照

①知識伝達型学びのスタイル

子どもに知識や技能を系統的に、教授する。教師の指導による学び、従来の学校教育での学びが、これに当たる。

②構成主義的学びスタイル

自分でつくってみたい、考えを外在化したりすることで、子ども自身に気づかせる。例えば、近年のワークショップ型学習に見られるように、子どもがグループでものづくりに取り組むなど、他者と協働し、対話をしながら行う学びである。

③恋愛型学びスタイル

このスタイルは上の2つとは少し違う視点から考えたもので、誰か特定の人や人たちに喜んでもらいたいと思って精一杯の準備と努力をしているときに起こる学びである。私たち大人の場合では、話をぜひ聴きたいと言われて招かれる講演会でのプレゼンテーションの準備や当日の発表で気付く学び、あるいは、病院で看護師さんやドクターが患者さんに喜んでもらいたいと思って日々接している時に発見する学びなどがこのスタイルである。好きな人に贈り物をする時の、あのドキドキ、ワクワクする気持ちが学びのエンジンになっているという意味で「恋愛型」と名づけた。図①では、子どものプレゼント作りの例を挙げている。何をプレゼントするか、それをどのように包むか、どのように渡すかなど、子どもが自分の思い描いた人を楽しませ、喜ばせるためにさまざまな工夫を凝らしている時の気づきや発見がパワフルな学びになっている。プレゼントをつくる子どもは、その作業自体に楽しさや喜びを感じているはずである。私は好きとか嬉しいとかが、これからの学びのキーワードになる予感がしてい

る。learning through loveはパワフルなコンセプトだと感じている。

● ドキドキ・ワクワク感を生む Playful Mindset

この「learning through love」を考え出すヒントをくれたのは、スタンフォード大学の心理学者Carol S. Dweckである。Dweckは、我々の行動に大きく影響する心理状態としてMindset（心の持ち方、心の姿勢）という概念を重視し、これを次の2つに分けて説明している。

1つ目は、Fixed Mindset。自分の能力を固定的に捉え、いくら頑張っても能力の伸びには限界があると考えるMindsetである。Fixed Mindsetの人は、仕事で困難な課題を依頼されると、「Can I do it?（自分ができるかな?）」と不安になり、「失敗したら他者からどう思われるだろうか」などとネガティブな発想にとらわれる。そのため、能力があっても、十分には発揮できないことがあると同時に、大切な学びの機会を失うことになる。

2つ目は、Growth Mindset。磨けば磨くほど自分の能力は伸びると考えるMindsetである。Growth Mindsetの人は、困難な仕事を与えられた時、これはチャンスだと思い、「How can I do it?（どうやったらできるのかな?）」と、ポジティブに考える。そのため、能力を十分に生かすことができ、さらには能力を伸ばせることも多い。

このように、人間は課題を与えられた時、Fixed MindsetかGrowth Mindset、どちらのMindsetを選択するかによって、不安を感じてやめてしまうか、挑戦してみようと一歩踏み出すことができるかが決まってくる、というのがDweckの考え方である。

私はこの2つの考え方に付け加えて、他

者への気持ちがエンジンになって行動を誘発するPlayful Mindsetというモチベーション・モデルを考えている。

Fixed Mindsetの人は自分が他者からどう思われるかという気持ち、Growth Mindsetの人は自分がどうしたいかという気持ちが心理の大部分を占める。これに対して、Playful Mindsetの人の心理は他者、しかも特定の他者を喜ばせたいという気持ちで満たされる。つまり、「How can I make you happy?（どのようにしたらあなたを喜ばせることができるか）」と考えるわけである。すると、驚かせたい、喜んでほしいという気持ちいっぱい、ワクワク・ドキドキしながら課題に取り組めるだろうし、その過程で学ぶことも多くなると私は考えている。相手に感謝される喜びが次はもっと喜ばせたいという行動へと繋がっていく。私はこれを「喜びの循環モデル」と呼んでいる。

● 教育に社会に Playfulを広げるために

オーケストラの指揮者は、聴衆のために夢中でタクトを振る。この指揮者のように、特定のオーディエンスを楽しませ、喜ばせたいという情熱を持って学ぶ姿勢が、学びには欠かせない。本気でものごとにかかわっている時に感じる、あのワクワク・ドキドキ感がPlayful Learningの正体である。

今後、Playfulな学びや、Playfulな生き方、働き方を社会に広げられるように、私は実践的な理論やモデルの構築、ワークショップの企画・運営に力を入れていきたいと思っている。Playful Learningと言わなくても、Learningと言うだけで、「学びって楽しい!」と子どもたちが感じてくれる社会が、1日も早く来よう、微力を尽くしていきたい。